魔弾の王と戦姫　IF STORY

マシュ・マック

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ブリューヌ王国の貴族、ティグルヴルムド＝ヴォルン（ティグル）は嘗て、隣国ジスタート王国を放浪した事がある。

そこで彼は様々な人々と出会い、多くの事を学んだ。

時は流れ、ブリューヌ王国とジスタート王国は両国の国境、ディナント平原で激突。

戦いは圧倒的不利な状況を覆したジスタート王国の勝利に終わり、ティグルは敵の指揮官にして、ジスタートが誇る七戦姫の一人、エレオノーラ＝ヴィルターリアの捕虜となる。

これは、後に英雄として語り継がれる一人の若者と、彼を支える七人の戦姫の活躍が

紡ぐ、新たなる伝説の物語である。
好評につき、正式連載する事に決定しました。
それに伴い、第一章（お試しの時に投稿した分）を少し改訂しました。

目次

第一章　蘇る魔弾
若者は戦場でかの国に思いを馳せる　1
戦姫は各々若者を思い、若者と風姫は再会する　5
戦姫は集い、朧姫は若者と抱擁を交わす　14
戦姫達は若者の器を目の当たりにする　31
若者と朧姫、思いを打ち明け、結ばれる　43
若者は守るべき物の為に立ち上がる　56
若者は頼もしき戦友と共に帰還する　69
そして若者は竜を射る　82
戦姫と侍女　99
第二章　魔弾の射手
戦後の朝の一幕　115
物語の裏話と衝撃の事実　122
旅立ちと出会い　136
戦姫アルテミシア＝ヴィルターリア　158

第一章　蘇る魔弾

若者は戦場でかの国に思いを馳せる

ＮｏＳｉｄｅ

「敵軍およそ五千に対してこちらは二万五千以上・・・か。よくもまあこれだけの兵をかき集めたもんじゃ」

「レグナス王子殿下の初陣だから、というのは本当なのですか？」

ブリューヌ王国とその東の隣国、ジスタート王国が刃を交える戦場、ディナント平原に向かう途中、青年ティグルヴルムド＝ヴォルン、ティグルと、初老の騎士、マスハス＝ローダントは、馬を並べて進ませながら話をしていた。

「事実じゃろうな。国王陛下が王子殿下を溺愛されているのは誰もが知っている。今度の戦にしても、子供の喧嘩に親が出てくる様なものじゃが、殿下の初陣を飾るには丁度良いものじゃろう。まあ、わしらは後方でおとなしくしておればいいのじゃからな」

「・・・・・・・・・」

「ティグル？」

「え!?　あ、ああ。そうですね・・・」

「・・・・・・・、ティグル」
「はい？」
「やはりおぬし、今度の戦は気乗りしないのじゃな？」
「ッ！」
　マスハスの問いにティグルの表情が陰る。
「・・・・・・・・・、思う所が無い、と言えば嘘のなります。ジスタートには色々と世話になりましたし・・・」
「やはりか・・・。それだけ四年前の旅がお主に大きな影響を与えたという事か」
「はい。ところで今回の戦、敵の指揮官は・・・」
「うむ。ジスタートの七戦姫の一人らしいぞ。十六という若さでありながら常勝不敗。剣の腕も優れており常に先頭に立ち剣を振るう様から『銀閃の風姫（シルヴァフラウ）』、『剣の舞姫（メルティス）』等と呼ばれているらしい」
（ん？　十六？　風？　剣？）
　ティグルはマスハスの言葉に出て来た単語の幾つかが気になった。
「マスハス卿。その戦姫の名前、あと治めている公国は分からないでしょうか？」
「名はたしか、エレオノーラ＝ヴィルターリアといったの。類い稀な美貌の持ち主だそうじゃ。治めている公国はライトメリッツ。お主のアルサスとヴォージュ山脈を隔て

て接している国じゃ」
　返って来た答えにティグルは目を見開いた。
「どうしたティグル、この戦姫がどうかしたのか？　もしやお主、会った事があるのか？」
「いえ。俺がジスタートを旅していた時、最初に訪れたのがライトメリッツなんですが、その時に公国を治めていたのは、アルテミシアという女性だった筈だと思いまして・・・」
「ほう」
　ティグルの言葉を聞いたマスハスは興味深そうな顔をしながら自身の顎髭を撫でる。
「ふむ・・・。わしはジスタートの事には詳しくないから何とも言えんが、恐らくお主が旅を終えてブリューヌに戻ってきた後で変わった、と考えるのが妥当であろうな」
「かもしれませんね。そういえばアルテミシアさん、生まれ付き体が弱いと言っていました。母上と同じで・・・」
「ティグル・・・」
　ティグルの脳裏に四年前の思い出が蘇る。当時、自分に良くしてくれた姉・・・、いや、彼女の大人びた雰囲気から、自分が九歳の時に亡くした母の面影を見た女性の姿が。
　そしてもう一つ、マスハスの言った中に気になった名前があった。
（エレオノーラ・・・）

その名を聞いたティグルの脳裏に、今度は旅の途中で出会った傭兵団の中にいた銀色の髪の少女の姿が浮かぶも、ティグルはそれを打ち消した。

（まさかな・・・。単なる傭兵団の一員でしかない彼女が公国を治める戦姫になるなんて・・・）

「まあ、いずれにせよ。後衛に配置されるわしらは余程の事が無い限り、戦姫に会う事は無いじゃろう。ならばせめて口に出さず、心中で無事を祈る位なら誰も咎めんじゃろう」

「そうですね・・・。ありがとうございます。相談に乗ってもらって」

「何、気にするな。さて、もう間もなくディナント平原が見えてくる。気を引き締めよ」

「はい！」

マスハスからの激励を受け、ティグルは気持ちを新たにし、ディナント平原を目指した。

この後、平原に到着したブリューヌ軍はジスタート軍の奇襲を受け大敗。ティグルはジスタート軍の指揮官の捕虜となる。

そしてこれが、新たなる英雄譚の序章（プロローグ）である事を、まだ、誰も知らない。

戦姫は各々若者を思い、若者と風姫は再会する

ＮｏＳｉｄｅ

「美味しい。やっぱりあなたの淹れる紅茶（チャイ）は美味しいわ、ミラ」

「フフッ。ありがとうソフィー」

ジスタート王国、オルミュッツ公国の公宮内の中庭で、オルミュッツ公国の戦姫、リュドミラ＝ルリエは、ポリーシャ公国の戦姫、ソフィーヤ＝オベルタスに自前の紅茶をごちそうしていた。

「それよりソフィー、ライトメリッツに行こうとしてたみたいだけど、エレオノーラに何か用事でもあるの？」

エレオノーラの名を口にした時、リュドミラの言には棘があった。

「正確にはエレンにじゃなくて、エレンがこの間の戦で連れてきた捕虜に、なんだけどね」

「捕虜？　エレオノーラが？　珍しい事があるものね。けどその捕虜とあなたに何の関係があるの？」

「手紙に書かれていた捕虜の名前に聞き覚えがあったの。だから本人かどうか確認しに

ね」
「へぇ～、ソフィーにブリューヌ人の知り合いがいるなんて知らなかったわ。なんて人なの？」
「ティグルヴルムド＝ヴォルンよ」
「・・・・・・え？」
「ティグルヴルムド＝ヴォルン。ブリューヌ王国の貴族の息子よ。・・・・・・って、どうしたのミラ？」
　ソフィーヤの口から出たティグルヴルムド＝ヴォルンの名前に、リュドミラは目を見開き、固まっていた。
「・・・・・・、ねぇ、ソフィー。これからその人に会いに行くのよね？」
「え？　ええ、そうだけど・・・」
「・・・・・・、私も一緒に行って良いかしら？」
「ええっ!?」
　今度はソフィーヤがリュドミラの言った事に驚く。
「どうしたのミラ？　あなたがエレンの所に行きたがるなんて・・・」
「別にエレオノーラに会いたい訳じゃないわ。寧ろあの女の顔なんて見たくもないわ」
「じゃあどうして・・・」

「・・・・・・・、ソフィーと同じよ」
「え？」
「私もその名前に聞き覚えがあるの。それでどうなの？」
「私は別に構わないけど・・・、エレンがなんて言うか・・・」
「ソフィーが良いなら十分よ。エレオノーラの事情なんて知った事じゃないわ。じゃあちょっと待ってて。すぐ支度するから」
「あっ！　ちょっと、ミラ！」
　事情が掴めないソフィーヤを余所に、リュドミラは中庭を後にし、自分の部屋を目指す。
「ティグルヴルムド＝ヴォルン・・・」
　リュドミラの脳裏には四年前に出会った弓を担いだ少年の姿が浮かんだ。
「・・・・・・、あなたなの？　ティグル・・・」

所変わってジスタート王国、王都シレジア、王宮の謁見の間。ここでは現在、ジスタート王と戦姫の謁見が行われていた。
「面をあげよ」
「はっ」
ジスタート王、ヴィクトール＝アルトゥール＝ヴォルグ＝エステス＝ツァー＝ジスタートの許しを得て、レグニーツァ公国の戦姫、アレクサンドラ＝アルシャーヴィンが頭を上げる。
「バルグレン、討鬼の双刃が主、アレクサンドラ＝アルシャーヴィンよ。この度そなたを呼んだのは他でもない。そなたに頼みたい事がある」
「陛下のご命令とあらば、喜んで拝命いたします」
「うむ。そなたにはライトメリッツへ行ってもらいたい」
「ライトメリッツ、エレオノーラの公国ですか？　何故また突然・・・」
ヴィクトール王の突然の命に、アレクサンドラは訝しげな表情を浮かべる。
「アレクサンドラよ。そなた、ティグルヴルムド＝ヴォルンを覚えておるか？」
「っ!!」
王の口から出た名前に、アレクサンドラは目を見張る。
「・・・・・・、ええ、覚えています。いえ、忘れる筈がありません。四年前、私の命を

救ってくれた恩人・・・。彼がどうかしたのですか?」
「うむ。実はエレオノーラが先のディナントの戦いの戦勝報告に来た際、ティグルヴルムド＝ヴォルンというブリューヌ貴族を捕虜にしたと報告した」
「なっ!?　エレンがティグルを捕虜に!?　それは本当なのですか陛下!?」
　アレクサンドラは驚きの余り立ち上がり、二人を愛称で呼んでしまうが、直ぐに慌てて跪く。
「も、申し訳ありません!　見苦しい姿を・・・」
「構わん。そなたのあの若者に対する思いは余も理解している」
「っ・・・」
　ヴィクトール王の冷やかしに、アレクサンドラは顔を赤くする。
「話を戻すぞ。そなたにはライトメリッツに行き、エレオノーラが連れてきた捕虜が本当にあの若者かどうか確かめてきてほしい」
「御意。では直ぐにライトメリッツに向かいます」
「ああ、待て」
　立ち上がり、謁見の間を出て行こうとするアレクサンドラをヴィクトール王が引き止める。
「結果の報告は書状を使者に届けさせればそれで良い」

ヴィクトール王の言葉にアレクサンドラは首を傾げる。
「私が直接報告しなくてよろしいのですか？」
「そなたにも募る話があろう。報告は部下に任せてゆっくりと旧交を暖めるが良い」
「っ！　し、失礼します！」
再び顔を赤くしたアレクサンドラは早足で謁見の間を後にする。
王宮を出た後、馬を走らせてライトメリッツに向かう。
（また、テイグルに会えるんだ！）
アレクサンドラは心底嬉しそうに頬を緩ませていた。

この時、テイグルの事で頭がいっぱいだったアレクサンドラは失念していた。
王との謁見の時、謁見の間には自分と王の他に人がいた事を。
そしてその中に、自分と同じ戦姫が二人いた事を。

「これはこれは、面白い話が聞けましたわ」
大鎌を持った戦姫は、その場から一歩も動かずに謁見の間から姿を消し、

「彼が・・・、ジスタートに・・・」
鞭を持った戦姫は謁見の間を出て足早に厩舎を目指した。

そして、同じくジスタート王国、ライトメリッツ公国。
「・・・・・・・・・・」
「エレオノーラ様、少しは落ち着いてはどうですか？」
執務机に座りながらソワソワするライトメリッツを治める戦姫、エレオノーラ＝ヴィルターリアを彼女の筆頭家臣、リムアリーシャが諌めるが、エレオノーラの耳に、彼女の言葉は全く入っていないようだ。
「・・・・・・、はぁ～、そんなに待ち遠しいのでしたら、私が起こして参りましょうか？」
「ん？　あ、ああ、そうだな。頼む、リム」
エレオノーラに頼まれたリムアリーシャは軽く頭を下げ、部屋を出て行く。

彼女が部屋を去った後、エレオノーラは、ふぅ、と一息つく。
「お前は私の物だ。か・・・、フフッ」
エレオノーラはディナントの戦いの時、ティグルに言った言葉を再び口にし、笑みを浮かべた。

ティグルヴルムド＝ヴォルンは寝起きが余りよくない。その為、幼少の頃から彼に仕える侍女は彼を起こす際、多少ではあるが乱暴な手段を用いる事もある。
「剣を口に入れて起こす、なんて珍しい起こし方をされたのは初めてだよ、リム」
「私もこの様なやり方で人を起こしたのは初めてです。ティグルヴルムド卿」
そんな会話がライトメリッツの公宮内のティグルの部屋であったとか無かったとか・・・。
「エレオノーラ様がお待ちです」
「分かった。すぐに行くよ」

起き上がったティグルは身支度を済ませ、リムと共にエレオノーラのいる部屋に足を進める。

「・・・・・・。久し振りだな、ティグル」

「名前を聞いて、ディナントで姿を見た時、まさかと思ったが、やっぱり君だったのか、エレン」

ティグルが部屋に入って最初に交わされたのは、四年振りの再会の言葉だった。

戦姫は集い、朧姫は若者と抱擁を交わす

ＮｏＳｉｄｅ

四年振りの再会を果たし、身代金の事を始めとした諸々の話をした後、ティグルとエレン、リムは公宮内の訓練場に来ていた。

ティグルはそこでエレンに命じられ、三百アルシン（約三百メートル）先にある的に命中させる事になる。

しかし、兵士の一人に渡された弓は非常に出来が悪い物で、渡された四本の矢の内、一本目、二本目は的に当たらず、周りに集まっている兵士達の嘲笑がティグルに向けられる。

だがそんな中、ティグルは自分に弓と矢を渡した兵士の視線が気になっていた。

秀麗な顔立ちに、艶やかな黒髪を肩まで伸ばした優男は、ティグルを嘲笑う事無く、まるで「お前の実力を見せてみろ」とでも言う様な目で彼を見ていた。

その事を訝しながらも、ティグルは気持ちを切り替える為に深呼吸し、ふと周りを見渡すと、城壁の上を黒い影が走るのが見えた。

影は城壁の上から弩（アーバレスト）を構え、エレンを狙撃する。

「危ないエレン！」
　ティグルはエレンに向かって叫ぶ。
「アリファール」
　しかし、エレンはその場から動こうとせず一言呟くと、激しい旋風が巻き起こり、風に絡めとられた矢は軌道が逸れ、地面に落ちる。
　リムは直ぐ様狙撃者を捕らえるよう命じるが、兵士達がいる場所から射た矢は狙撃者には届かず、剣や槍を持った兵が城壁に上がるが、距離が離れ過ぎている為、このままでは逃げられてしまう。
　そんな中、ティグルは三本目の矢を弓につがえ、狙撃者に向けて放つ。矢は大きな弧を描き、狙撃者の足を射抜き、狙撃者はその場に踞り、兵士達に捕らえられる。
　ティグルの弓の技量を目の当たりにして、兵士達は愕然とした表情をティグルに向け、ティグルに弓を渡した優男も驚きを露にしている。
　そんな状況にティグルは肩をすくめながら四本目の矢を手に取りながらエレンに問いかける。
「一応訊くが、まだやるか？　エレン」
　ティグルの問いかけにエレンは振り向きながら答える。
「いや、充分だ。よくやった、ティグル」

心底嬉しそうな顔でエレンはティグルに笑いかける。

「ええ、本当によくやりましたよ。ティグルヴルムド＝ヴォルン」

「っ!!　誰だ!?」

突然訓練場に響いた覚えの無い女の声に、ティグル、エレン、リム、そして兵士達の間に再び緊張が走る。

暫くして、物陰から一人の女性が姿を現す。特徴的なデザインの大鎌を持つ、青みがかった長い黒髪の女性に、エレンは覚えがあった。

「お前・・・、ヴァレンティナ!?」
　女性の名はヴァレンティナ＝グリンカ＝エステス。エレンと同じジスタート七戦姫の一人として、オステローデ公国を治める女性である。
　彼女の突然の来訪に、エレンは警戒心を高める。
「何故お前がここにいる。お前の公国とここはかなり離れている。通りすがり、という訳では無さそうだが?」
　険しい表情のエレンの問いかけに、ヴァレンティナは表情を変える事無く答える。
「ええ。今日はここにいる私の将来の右腕に会いに来ました」
「何?」
　ヴァレンティナの言う事の意味が分からず、エレンは訝しげな顔をする。そんなエレンを余所に、ヴァレンティナはティグルに近づく。ティグルの前に立つと、ヴァレンティナは微笑む。
「久し振りね、ティグル。四年前よりも更に腕を上げたのね」
「まぁ・・・な。ティナも元気そうで何よりだよ」
「ええ。でも、成長したのは弓の腕だけじゃない」
　ヴァレンティナ、ティナは右手を伸ばし、ティグルの頬に当てる。
「ちょっ!?　ティナ!?」

突然のティナの行動にティグルは頬を赤くして狼狽える。
「一目見て分かったわ。ティグル、あなたはこの四年間で多くの事を経験して、あの頃と比べて一回りも二回りも成長してる。やっぱりあなたには私の右腕としてオステローデに来てもらうしかないわ」
ティナはティグルの頬に手を当てたままエレンの方を向く。
「という訳だからエレオノーラ。ティグルを私に譲ってちょうだい。勿論タダでとは言わないわ。あなたがティグルに要求した身代金の倍の金額を支払うわ」
屈託ない笑顔でとんでもない事を口にするティナ。
彼女の言った事にティグルとリム、そしてライトメリッツの兵士達は唖然とする。
そんなティナに、エレンはワナワナと身を震わせ、彼女は顔に幾つもの青筋が浮べていた。
「・・・・・・・・、言いたい事はそれだけか？　ヴァレンティナ」
「今すぐティグルから離れろぉぉおおおおおおおおお!!!!」
エレンは腰にある自身の竜具『降魔の斬輝』の異名を持つ長剣、アリファールの柄に手をかけ、猛スピードでティナに斬り掛かる。
ガキイイイイン!!
「はぁ〜、乱暴にも程がありますわよエレオノーラ?・」

しかし、エレンの斬撃はいつの間にかティグルの頬から手を離したティナの持つ竜具『封妖の裂空』の異名を持つ大鎌、エザンディスによって受け止められる。
「ちっ!!」
攻撃を防がれたエレンは後ろに後退し、距離を取る。
「全く、客人に斬り掛かるなんて、戦姫以前に人としての品格を疑いますわよ?」
やれやれ、と肩をすくめながら言われたティナの言葉は、エレンの怒りの感情を逆撫でにする。
「黙れ!!　そもそも貴様を客として招いた覚えは無い!!」
顔を真っ赤にしながらエレンはティナに食って掛かり、そんなエレンにティナは面倒くさそうに溜め息をつく。
「仕方ありませんね。ティグル、今から少々この子の相手をしなければならないので話はまた後で」
そう言ってティナも同じくエザンディスを構え、エレンと向き合う。
一触即発の緊迫した空気が訓練場に流れる。
そこへ、公宮に仕える侍女らしき女性が現れる。
「戦姫様!　失礼いたします」
「何だ!?」

「ひっ!?」
　しかし、頭に血が上ってるエレンは不意に侍女に殺気混じりの怒号をぶつけてしまい、ぶつけられた侍女は恐怖のあまり、その場にへたり込んでしまう。
「おっ、おいエレン!!　いくら何でも八つ当たりはまずいぞ!」
　ティグルは慌てて侍女の元へ駆け寄る。
「大丈夫か?」
「は、はい・・・」
　余程怖かったのか、侍女は小刻みに震えている。
「すまない。今彼女は少し虫の居所が悪いみたいなんだ。ほら、立てるか?」
　震える侍女に優しく微笑みながらティグルは手を差し伸べる。
「あ・・・、ありがとうございます」
　手を差し伸べられた侍女の震えはいつの間にか止まっており、侍女は少し顔を赤くしながら手を取り、立ち上がる。
「それで、エレンに何か用事があったみたいだけど・・・」
「あっ、はい。実は、戦姫様にお客様がお見えになっているのですが・・・」
「そうか。お～いエレン!　お前に客が来てるらしいけど、どうする?」
　侍女の話しを聞いたティグルは、少し離れた所で今だティナと対峙しているエレンに

問いかける。
「今忙しい!!　後にしろ!!」
「・・・・・・・、はぁ～。どうやらまだ頭が冷えていないらしい。悪いけどお客人には少し待っててもらえるか?」
「それが・・・、その・・・」
戸惑う侍女の様子にティグルは首を傾げる。
「一体何の騒ぎなの?　これは」
再び訓練場に覚えの無い女性の声が響く。声のした方を向くと、そこには三人の女性がいた。
「全く、来客を待たせるなんて、ホントに戦姫としての教養がなってないわね」
一人は青色の髪をショートヘアにまとめた槍を持った少女。
「って、ヴァレンティナ!?　どうしてあなたがここに!?」
もう一人は錫杖を持った、緩やかなウェーブを描く淡い金髪の女性。
「それよりあそこにいるのはやはり!」
そして、もう一人は右目が金色、左目が碧色の、鞭を持った赤い髪の少女。
その三人に女性にティグルは覚えがあった。
「ミラ!　ソフィー!　リーザ!」

ティグルは三人の愛称を呼んだ。
そう、この三人はエレン、ティナと同じジスタート七戦姫である。
青髪の少女はオルミュッツ公国のリュドミラ＝ルリエ。
金髪の女性がポリーシャ公国のソフィーヤ＝オベルタス。
赤髪の少女がルヴーシュ公国のエリザヴェータ＝フォミナである。
ティナに続き、新たに三人の戦姫の登場に、リムを始めとするライトメリッツ兵達はまたしても唖然とし、ティナも少なからず驚いている。
「「ティグル!!」」
ティグルに名前を呼ばれた三人の内の二人、ミラとリーザは嬉しそうに顔を綻ばせながらティグルの元に駆け寄る。
「久し振りねティグル。また会えて嬉しいわ」
「あなたがジスタートにいると聞いた時は本当に驚きましたわ」
「驚いたのはこっちだよ。二人とも、どうしてここに？」
仲睦まじそうに言葉を交わすティグル、ミラ、リーザの三人。
ビュオオオオオオッ!!
「うおわぁっ!!」
「「っ!!」」

刹那、強い旋風が巻き起こり、ティグルの体を浮かせる。宙に浮いたティグルはミラ達の傍から離れ、エレンの近くに下ろされる。

「・・・・・・・・・・・・・・」

「エ、エレン？」

アリファールを鞘に納め、無言で近づいてくるエレンに、ティグルは困惑する。

ギュ!!

「「「「なっ!?」」」」

「エ、エレン何を!?」

ティグルの目の前まで来たエレンはその場にしゃがみ込み、ティグルの体を力一杯抱き締めた。

エレンの突然の行動にミラ、ソフィー、リーザ、ティナ、リムは声を上げて驚きを露にし、ティグルもまた顔を赤くして慌てふためき、訓練場にいるライトメリッツの兵や侍女達は言葉を失う。

「お、おいエレン!!」

「動くな」

腕の中でもがくティグルを、エレンは一言で大人しくさせる。

「もう少しで良い。このままでいさせてくれ」

そう言われたティグルはもがくのを止める。それから数分程ティグルを抱き締めていたエレンは満足げな顔をして、ティグルから離れた。
「すまないティグル。だが、おかげで元気が出た」
エレンは再びアリファールを抜き、ミラとリーザがいる方へ歩いていく。
「お前は少し下がっていろ。私はあのコソ泥共の相手をしてくる」
一方、ミラとリーザは先程までとは打って変わり、不機嫌を露にした表情でエレンを睨んでいた。
「何の真似かしら？　エレオノーラ」
「なに、私の許し無くティグルに馴れ馴れしくする貴様らを叩きのめしてやろうと思ってな。その為の力をティグルに貰っていた」
「ティグルは私の恩人。彼と再会を喜び、旧交を暖めるのにあなたの許しが必要なのかしら？」
「当然だ。ティグルは私の捕虜（もの）なのだからな」
「人をもの扱いするなんて、本当に教養がなってないわね、エレオノーラ」
「ふん。人の公宮に勝手に押し入る貴様らに言われたくないな」
言葉を交わしていく内に、ミラとリーザの額に青筋を浮かんでいき、自分の竜具を持つ手に力が入る。

ミラは『破邪の尖角』の異名を持つ槍、ラヴィアスをエレンに向けて突きつけ、リーザは『砕禍の閃霆』の異名を持つ鞭、ヴァリツァイフを握りしめる。

エレンの持つアリファールを旋風が包み、ミラのラヴィアスが冷気を発し、リーザのヴァリツァイフに紫電が走る。

三者共に闘気は充分。訓練場にいる者達は巻き込まれない様に、三人から距離を取る。

今正に、三人の戦姫の戦いが始まろうとしたその時、

「ティグル!!」

またしても訓練場に女性の声が響く。声のした方を見ると、そこには綺麗な黒髪を短く切り揃えた女性がいた。呼吸の間隔が短い所から、どうやら走って来たのだと思われる。

「サーシャ・・・」

ティグルの口から人の名前らしき言葉が零れる。

黒髪の女性がティグルを見つけると、女性の顔は嬉しそうに綻び、目尻には涙が溜まっていく。

「ティグル!!」

女性はティグルに向けて走り出し、そのままティグルの胸に飛び込み、彼に抱きついた。

「なっ!?　サ、サーシャ!?」

「会いたかった。ずっと、君に会いたかったよ。ティグル」

ティグルの胸の中で嬉し涙を流す女性、レグニーツァ公国の戦姫、アレクサンドラ＝アルシャーヴィン、サーシャの腰には彼女の竜具『討鬼の双刃』の異名を持つ双剣、バルグレンが収まっていた。

訓練場にいる者達は最早何が何だか分からなくなった。

無理も無い。王都であるシレジアならばともかく、一つの公国に七戦姫の内、六人が同時に、しかも何の招集も無しに集まる事等、殆ど無いに等しいのだから。

そしてそれはエレン達、戦姫も同じであった。

「「「「・・・・・・・・・・・・・・」」」」

サーシャの突然の登場にエレン達は開いた口が塞がらない状態だった。

「ティグル・・・」

「サ、サーシムグッ!?」

「んっ・・・」

「「「「なあっ!?!?」」」」

暫く抱き合っていると、サーシャは不意にティグルの首に手を回し、潤んだ瞳でティグルを見つめながら顔を近づけていき、やがて、二人の唇が重なった。

その光景を目の当たりにしたエレン達、そしてライトメリッツの兵と侍女達は只でさえ開いていた口を更に、もう顎が外れるのではないかと思う程開けた。

「・・・、ずっとこの日を待っていたよ。ティグルに僕のファーストキスをあげられる日を」

ティグルとサーシャは唇を重ねてから数秒後、サーシャは重ねた唇を離し、頬を軽く

赤らめながら、心底嬉しそうに微笑んだ。

「なっ・・・!? なっ・・・!? なっ・・・!?」

サーシャとは対照的に、ティグルの顔はドンドン赤くなっていく。

「何をやっているんだサーシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!!」

そして、ライトメリッツの公宮に、エレンの叫びが響いた。

それから暫くの間、訓練場はパニックとなった。
公宮に仕える侍女達は黄色い歓声をあげ、兵達は呆然とその場に立ち尽くしていた。
そして、戦姫の内、エレン、ミラ、リーザは顔を真っ赤にしながらティグルとサーシャに食って掛かり、ティナは顎に手を当ててブツブツと何か呟き、ソフィーは微笑ましそうな顔をしていた。
そして・・・、
「何が・・・、一体どうなっているんだ・・・」
ティグルに粗悪な弓を渡した優男、ルーリックの呟きが聞こえたティグルは、それに激しく同意したかった。
結局、騒ぎが治まったのはそれから数時間後の事だった。

因みに・・・、

「・・・・・・・・・・・・・・、何だろう？　ものすご～く仲間はずれにされた様な気がしてならない・・・」

ジスタートから遠く離れた大地で、巨大な斧を持った少女がそんな事を呟いたとか、呟かなかったとか・・・。

戦姫達は若者の器を目の当たりにする

ＮｏＳｉｄｅ

訓練場での騒ぎが治まった後、ティグル、エレン、サーシャ、ミラ、ソフィー、リーザ、ティナ、リムは公宮内の来客用の部屋に移動した。

サーシャ達はエレンに自分達が四年前にティグルと顔を合わせている事と、ティグルに会う為にライトメリッツに来た事を話した。

また、エレンがサーシャに訓練場での事を訊くと、サーシャは「好きな男性に自分のファーストキスをあげたいと思うのは女性として当然の事だと思うけど？」と、何食わぬ顔で返した。

エレン達は唖然とし、ティグルは訓練場での事を思い出して顔を赤くした。

こうして、ティグル達が四年前の事も交えて話を弾ませていると、誰かが部屋の扉を叩き、部屋の外から女性の声が聞こえてきた。

「失礼します。戦姫様」

「どうした？」

「ルーリック様が戦姫様とティグルヴルムド卿にお話があるそうなのですが・・・」

「ルーリックが？　フム・・・・・・。いいだろう、通せ」
「承知しました。さっ、どうぞ」
「失礼いたします」
　今度は男性の声が聞こえ、扉が開くと、訓練場でティグルに弓を渡した黒髪の優男が入って来た。
「お話中の所、申し訳ありません」
「構わん。それで、話とは何だ？」
「はい。実は・・・」
「その前に、少し良いかしら？」
　ルーリックが何かを言おうとした時、ティナが口を挟んだ。
「何だ、ヴァレンティナ」
「いえ、少し確かめたい事がありましたので・・・」
　自身に訝しげな視線を向けるエレンに、少し視線をやった後、ティナはルーリックに視線を戻す。
「あなた、確か訓練場でティグルに弓を渡していましたね？」
　ティナの問いにルーリックは一瞬目を見開くが、すぐに目を閉じ、口を開く。
「はい」

「そう・・・。ならあなたは気付いていた筈よね？

ティグルに渡した弓が粗悪なものだという事に」

「何？」

「どういう事だい、ヴァレンティナ？」

ティナの問いかけにエレンは目を見張り、サーシャは質問の意味を問う。

「どういう事も何も、言葉の通りです。私はティグルがエレオノーラ達と共に訓練場に来た所から見ていましたが、ティグルが使っていた弓は遠目に見ても劣悪な物だと分か

りました。私の見立てでは、あんな弓で三百アルシン先の的を射る事なんてまず不可能。それどころか百アルシン飛ばす事さえ難しいと判断しました」

やがて、ティナがルーリックに向ける視線に怒気が含まれる。

「もしあなたがその事に気付いていなかったのであれば、私はあなたの価値観を疑う、もしくはあなたの怠慢を咎めます。ですが、もしその事に気付いていたのであれば、その時は・・・」

そこから先に言葉は続かず、代わりにティナの視線に含まれる怒気が増した。

更にティナが言おうとしている事が分かったからか、エレン、ミラ、リーザも怒気を含んだ視線をルーリックに向け、サーシャ、ソフィー、リム、ティグルの彼への視線は怒気こそ含んでいないが真剣な物だった。

そんな視線を暫く浴びた後、ルーリックはどことなく観念した表情で跪きながら口を開いた。

「・・・・・、ヴァレンティナ様がお察しの通りにございます。私は、弓が粗悪な物である事を知った上で、ヴォルン伯爵にお渡ししました」

「っ!!　ルーリック、貴様!」

ルーリックの告白に、エレンは怒りを露にしながら椅子から立ち上がる。

「随分と巫山戯た部下がいるのね、エレオノーラ」

「捕虜を晒し者にして、辱めるなど、下衆の極みですわよ」
ルーリックを睨みながらエレンを非難するミラとリーザ。サーシャ、ソフィー、リムもまた、険しい目つきで彼を睨んでいた。
そんな中、ティグルはどこか納得した様な顔をしていた。
「そう・・・」
ジャキィン!!
「なっ!?　ティナ!?」
ティナは一言呟くと、エザンディスの刃をルーリックの首筋に当てる。ルーリックは一瞬体を震わせるが、すぐに落ち着きを取り戻した。
「エレオノーラ。今私は無性にこの男の首を切り落としたいのですが、よろしいですか？」
「構わん。好きにしろ」
「エレン!!」
ティナの問いに間髪を容れず、冷淡に答えるエレンに、ティグルは戸惑う。
「正直に答えた事は評価に値しますわ。何か言い残す事はありますか？」
「・・・・・・、でしたら一つだけ」
エザンディスの刃を当てられながら、ルーリックは懐から一通の手紙を取り出す。

「これを、ヴォルン伯爵にお渡しください。これをお渡しする為に、私はここに来ました」
「俺に?」
突然の申し出に、ティグルは首を傾げる。
「そうですか・・・、ティグル」
ティナはエザンディスを当てながら手紙を受け取り、ティグルに投げ渡す。
「手紙は確かにティグルの手に渡りました。確認しましたね?」
「はい」
「では・・・」
「待ってくれティナ!!」
ティナはエザンディスを握る手に力を込め、手前に引こうとした瞬間、ティグルが彼女の手を掴んだ。
「何もそこまでする必要はないだろう!?」
「何言っているのティグル」
「その男はあなたを笑い者にして不名誉と屈辱を与えようとしたのですよ? 死を持って償わせるべきですわ」
「ティグル、不本意だが今回ばかりは私もこいつらと同感だ」

ティナを諌めようとするティグルに対し、冷淡に返すミラ、リーザ、エレンの三人。
「不名誉と屈辱を与えようとしたと言っているが、そもそも俺は気にしていない。寧ろこんな事で人に死なれたらそっちの方が寝覚めが悪い！」
「こんな事って・・・、あなたはそれで良いの？　ティグル」
ティグルの発言が気になったソフィーが問う。
「ああ。寧ろこんな事、ブリューヌでは珍しく無い。もう慣れたよ」
「慣れたって・・・」
寂しげな顔をするサーシャを余所に、ティグルはルーリックを庇う様にティナの前に立つ。
「頼む！　どうか考え直してくれ！」
「なっ!?」
「ティグル!?」
ティグルはその場でティナ達に向けて頭を下げ、その様子にエレン達は唖然とする。
そんな中、サーシャだけはどこか納得した様な微笑ましい顔をしていた。
「・・・・・・、はぁ～」
暫くして、ティナは溜め息をつきながらエザンディスをルーリックの首から離した。
「気が変わりました。エレオノーラ、ここはティグルの意思を尊重するのが最善と考え

ますがいかがかしら？」
「・・・・・・・・・、ルーリック、お前のした事は本来なら死刑を言い渡されても過言ではない大罪だ。だが、当事者であるティグルの気持ちを汲み、今回は不問とする。ティグルに感謝する事を忘れるな」
「エレン・・・、ありがとう」
　エレンの決定に、ティグルは感謝する。
「あの・・・、ヴォルン伯爵」
「ん？」
「・・・、何故、自分を・・・」
　振り返ると、「どうして自分を助けたのか？」と言いたげな顔をしたルーリックがティグルを見ていた。
「何でって訊かれても・・・、そうだな・・・、強いて言うならお前が悪い奴には思えなかったからだ」
「は？」
　ティグルの言った事にルーリックだけでなく、エレン達も呆けた顔になる。
「確かに俺にあの弓を渡したのはお前だけど、何か事情があったんだろ？　その証拠にお前、俺の事一度も笑わなかったし」

その言葉に、エレンとリムはそういえば、と言った表情を浮かべる。
「さっきも言ったが俺は別に気にしていない。だからお前も気にする事は無い。それで良いだろう？」
「ヴォルン伯爵・・・、いえ、ティグルヴルムド卿・・・」
いつの間にか、ルーリックの目には涙が溢れていた。
そして、ルーリックはティグルの前に跪き、何度も、何度も、「ありがとうございます」と繰り返し、ティグルは苦笑いを浮かべていた。
そんな二人の様子に、エレン達の頬は自然と緩んでいた。
「ところで、この手紙は誰からのなんだ？　俺とお前は初対面の筈だから、手紙をもらう理由はないんだが・・・」
「ああ！　これは失礼いたしました！」
ルーリックは涙を拭い、表情を引き締める。
「その手紙は先代のライトメリッツの戦姫、アルテミシア様が、あなた様に当てた手紙です。ティグルヴルムド卿」
「なっ!?　アルテミシアさんだって!?」
ルーリックの口から出た名前に目を見開くティグル。また、エレン達も少なからず驚いていた。

「ルーリック、何故お前がそんな物を持っている？　・・・いや、そういえばお前はあの人の代からこの公宮に仕えていたな」
「はい。この手紙はアルテミシア様が戦姫の座を辞され、公宮を去る時に『もしも、ティグルヴルムド＝ヴォルンという男がこの公宮に来たら渡してほしい』と、渡された物でございます」
「・・・・・・、読んでみても良いか？」
「無論にございます」
　ティグルは封を開け、中に入った便箋を取り出し、広げる。
『親愛なるティグルヴルムド＝ヴォルン殿、あなたがこの手紙を読んでいるという事は、私はもう公宮にはいないでしょう。あなたがブリューヌに戻ってからも私は戦姫としてこのライトメリッツを治めてきましたが、日を重ねるごとに体は重くなって行き、戦姫としての務めを果たすもの難しくなって行きました。そして、遂にアリファールは私の元を離れて行きました。その後私はヴィクトール陛下と私の後任としてライトメリッツの戦姫になったエレオノーラ、エレンちゃんの計らいで、ライトメリッツの外れの小さな田舎で静かに暮らす事になりました。なので私が戦姫としてあなたと再会する事はもう無いでしょう。ですがこれだけは忘れないでください。例えどんな事があっても、私はあなたの事を大切に思い続けます。あなたがジスタートを去る時にも言

いましたが、あなたは私にとって息子も同然です。困った事があったらいつでも私を訪ねて来てください。私に出来る事なら助力は惜しみません。最後にあなたにこの言葉を贈らせていただきます。これから先、あなたが進む道には幾つもの困難が待ち受けているかもしれません。ですが忘れないでください。あなたは決して一人ではありません。あなたを助けてくれる味方は必ずいます。勿論、私もその一人です。そして、あなたの未来が幸溢れる物であらん事を、切に願います。元ジスタート七戦姫、アルテミシア＝アッシュベルからティグルヴルムド＝ヴォルンに、愛を込めて『・・・・・・。ありがとう・・・、母さん」

手紙を読み終わった後、ティグルは涙が流しながら手紙を抱き締め、静かに呟いた。

その後、ティグル達はルーリックも交えて、談話を再開した。

ルーリックはティグルに訓練場での事を再度詫び、この様な事をした訳を話した。曰く、アルテミシアはティグルがジスタートを去ってから彼女が戦姫を辞すまでの間、ほぼ毎日のようにティグルの名を口に出し、その弓の腕や人となりを褒めていたと言う。それをずっと聞かされて来たルーリックは是非その弓の腕を見てみたいと思い、あの様な行動に出たと言う。

それを聞いたティグルは自身が評価された事を喜ぶべきか、その所為で面倒な事になった事を悲しむべきか、何とも言えない気持ちになったと言う。

やがて日が暮れて夜になり、夕食を食べた後も、ティグル達は葡萄酒(ヴィーノ)片手に夜が深けるまで談話を続けた。

サーシャ、ミラ、ソフィー、リーザ、ティナの五人はエレンの計らいにより、今夜は公宮内に泊まる事になった。この時、エレンはミラ、リーザ、ティナを泊めるのを渋ったが、ティグルの口添えもあり、仕方無く了承した。

若者と朧姫、思いを打ち明け、結ばれる

ＮｏＳｉｄｅ

「それでは、おやすみなさい、ティグルヴルムド卿」

「ああ、ありがとう、ルーリック」

談話を御開きにした後、ティグルはルーリックに送られて自分に割り当てられた部屋に戻って来た。

「さてと、さっさと寝るか」

ティグルがベッドに腰を下ろし、手をつこうとした時・・・、

ふにょん

「・・・・・・ん？」

右手にやわらかい感触がした。

ふにょん　ふにょん

試しに二度、右手に触れた物を握ってみると先程と同じ感触がした。冷や汗を流しながら慌てて布団をひっぺがすティグル。

「・・・・・・、キスをして顔を赤くしていたのを見た時は純情だなと思ったけど・・・、意外と大胆なんだね？」

するとそこには、顔を赤くした寝間着姿のサーシャがティグルのベッドで横になっていた。因にティグルが先程から掴んでいた物の正体が彼女の胸であったのは言うまでもない。

「うおわぁあああああああああ!!!!!」

驚きの余り、ティグルはベッドから飛び落ち、尻餅をつく。

「なななな何でサーシャがここに!?!?!」

顔を真っ赤にして驚きを露にするティグル。

ドンドンドン!!

「どうしましたティグルヴルムド卿!?　何かもの凄い音が聞こえましたが!?」

刹那、扉が叩かれ、廊下側からルーリックの声が聞こえてくる。

（まずい！　今この状況を見られるのは非常にまずい!!）

「だ、大丈夫だルーリック！　ちょっと、ベッドに座り損なっただけだ！」

「そうですか？　よろしければ、念のため塗り薬をお持ちしましょうか？」

「いや、大丈夫だ。心配かけてすまなかった！」
「・・・、分かりました。では、おやすみなさい、ティグルヴルムド卿」
「ああ、おやすみルーリック」
　遠ざかって行くルーリックの足音を聞きながら、ティグルは呼吸を整える。正常に戻ったのを自覚した後、再びベッドに目をやると、やはりそこにはサーシャがいた。
「もう、そんなに驚く事は無いんじゃないか？　ティグル」
「いや驚きの余り心臓が止まるかと思ったよ。それより、何でサーシャがここにいるんだ？」
「見ての通り、ティグルと一緒に寝ようと思って待ってただけだけど？」
　不思議そうに首を傾げる仕草をするサーシャに、ティグルは一瞬かわいいと思いつつも頭を抱える。
「あのな、仮にも公国の戦姫と敵国の捕虜、それ以前に年頃の男女が寝所を共にするのはまずいだろ？」
「それなら問題無いよ。僕は自分に意思でここに来たんだから」
「いや、そういう問題じゃなくてだな・・・！」
「それとも・・・」
　急にサーシャの声から元気が無くなる。

「ティグルは僕と一緒に寝るのが嫌なのかい？」
サーシャはゆっくりとティグルの服を掴み、瞳に涙を溜めながら、不安そうに尋ねた。
「・・・・・・」
そして、ティグルにその問いに、はい、と答える度胸は無かった。結局、ティグルはサーシャと一緒に寝る事を了承したのだった。

「サーシャ・・・、そんなに抱きつかれると、色々と困るんだが・・・」
「そうかい？　でもこうしないとどちらかがベッドから落ちそうになるから・・・」
（そりゃ一人用のベッドに二人寝ようとすればな・・・）
「それに、こうしていた方が君の温もりを感じられるから・・・」
サーシャは頬を赤く染めながら一層ティグルに抱きついてくる。
「なっ!?　～～～」
ティグルは再び顔を赤くしながら寝返りを打ち、サーシャに背を向ける。
「む～っ、つれないな・・・」
サーシャは不満そうに頬を膨らませる。
「・・・ティグル」

しかし突然、サーシャは先程とは違う声音で名を呼びながら、ティグルの体に手を回し、彼の背に抱きつく。
「サ、サーシャ・・・?」
「・・・・・・・、言っておくけど、僕は誰にでもこんな事をしてる訳じゃないよ? 僕がこんな事をするのは君だけ。ティグルだからこうしているんだよ?」
「・・・・・・・」
「好きだよ、ティグル。愛してる。一人の女として・・・」
「サーシャ・・・」
「あの日から、君の事をずっと思ってきた。四年前、君が僕の命を救ってくれたあの時から、ずっと・・・」
サーシャの告白を聞き、ティグルの脳裏に四年前、サーシャと初めて会った日の記憶が呼び起こされる。
「あの時、君がいなければ、僕は今ここにいなかった。今こうしていられるのは全て君のおかげだ」
「・・・・・・・」
「だからティグル、このままずっとジスタートに居てほしい」
サーシャがティグルを抱き締める手に力を込める。

「エレンが君をブリューヌと同じ伯爵位をもって遇すると言っていた。勿論差別もしないと。その話を受けてほしい。そうすればいつでも会うことができる」
「・・・・・・、ありがとう、サーシャ」
　サーシャには見えないが、ティグルは心底嬉しそうに、それでいて穏やかな笑みを浮かべている。
「でもごめん。その話は受けられない」
「っ！」
「ありがたい話だとは思っている。こんな誘いはブリューヌではまず有り得ないだろうな」
「じゃあ、どうして・・・」
　サーシャの瞳に涙が浮かび始める。
「俺には帰るべき、そして守るべき場所がある。アルサス。父から受け継いだ俺の領地だ。そこを放り出す事は出来ない」
「・・・・・・、どうして」
「え？」
「どうして君はそこまでブリューヌに尽くそうとするんだい？」
　問いかけるその声は、今にも消えそうな位、弱々しい物だった。

「ブリューヌは弓を蔑視していると聞いた。昼間、君も笑い者にされる事なんて珍しく無いって言っていた」
「ああ。実際、王宮で弓が得意だと言った時も大笑いされたし、この間のディナントでもそんな事があった」
「ならどうして君はそんな国に尽くそうとするんだ!?」
突然声を荒げるサーシャにティグルは戸惑う。
「サ、サーシャ・・・?」
「僕は君とは四年前と今日を含めた数日しか直接会った事は無い！　でも！　そんな短い期間でも君の良い所はたくさん見つけられた！　なのにどうして僕よりも直接会う機会のあるブリューヌ人は君を笑うんだ!?　どうしてティグルの事を認めようとしないんだ!?」
大粒の涙を流しながら、サーシャは自身の心の内をさらけ出す用に叫ぶ。
「どんな好待遇で迎えられえてもそれをはね除け、尽くそうとする忠臣を、どうしてブリューヌは嘲笑う事が出来る!?　どうしてそんな国がティグルに尽くされるんだ!?　どうして僕の思いがそんな国に負けるんだぁ!!」
泣き崩れるサーシャの声は、ドンドン弱々しくなっていく。
「どうして・・・、なんだ・・・、ティグル・・・。僕の何がいけないんだ？　こんなに

も・・・、君を愛しているのに・・・」
　サーシャは悔し涙を溢れさせながら、ティグルの背中を叩く。
「サーシャ・・・」
　サーシャの思いを一通り聞いたティグルは寝返りを打ち、彼女と向かい合う体勢になり・・・、

ギュッ!!

「えっ?」
　サーシャを思い切り抱き締めた。
「ありがとう、サーシャ。君がそこまで俺の事を思ってくれてるなんて知らなかった。凄く嬉しいよ」
　サーシャが顔を上げると、そこには優しげな微笑みを浮かべたティグルの顔があった。
「俺も、サーシャの事が好きだよ」

「え？」
突然の告白にサーシャの思考は一瞬停止する。
「んっ!?」
そして、昼間の訓練場の時とは逆に、今度はティグルがサーシャの唇に、自分の唇を重ねた。数十秒程重なっていた唇はやがて離された。
「これで、信じてくれたかな？」
照れ臭そうに頬を緩めながらティグルはサーシャに問いかけ、サーシャは再び目から涙が流れ出す。ただし、その涙は悲しみから流れる涙ではなく、幸せから流れる涙だった。
「ずるいよ・・、ティグル・・・。こんな事されたら・・・、信じるしか無いじゃないか・・・」
幸福の涙で頬を濡らしながら、サーシャはティグルに抱きついた。
「じゃあ今度は俺の話を聞いてくれるか？」
目尻に涙を浮かべながら、サーシャは頷く。
「まず最初に、何故そこまで尽くそうとするのかと言ってたけど、俺は別にそこまでブリューヌに忠義立てしてるつもりは無い」
いきなりの爆弾発言に、サーシャは目を丸くする。
「無論、貴族として必要最低限の忠誠は誓っている。だけど俺にとって一番大切なのは

あくまでアルサスだ。何故ブリューヌに尽くすのかと言っていたけど、それはアルサスがブリューヌの領土だからだ」

遠い目をしながらティグルは自身の胸の内を口にする。

「俺にとってアルサスはかけがえの無い宝の山なんだ。俺を慕ってくれる民達、生まれた頃からの思い出。他にもたくさんある。そんなアルサスを守る領主という立場を、俺は誇りに思っている。だからこそ、もしアルサスに危機が訪れたら俺はそれが何であろうと、誰であろうと戦う。父が死んで、アルサスの地を受け継いだあの日、俺はそう胸に誓った」

サーシャがティグルの目を見ると、そこに力強い光が宿っているのが見えた。

「今アルサスは領主不在の状態にある。このまま放置しておけばいずれ領民の生活にも影響が出る。俺はそれを見過ごす事は出来ない。だから一日も早くアルサスに戻りたい」

「・・・・・・、君の誓いはとても立派だと思うよ、ティグル。でも具体的にはどうするんだい？　今の君はエレンの捕虜だ。身代金が払えなければ君はアルサスに戻る事は出来ない。身代金の宛はあるのかい？」

「あ～、まあ、なんと言うか・・・」

身代金の話を出した途端にティグルは困った様な顔をして、頬をかく。

「その事なんだが、サーシャ・・・。もし俺がアルサスを担保に身代金を肩代わりしてくれ。って言ったら、どうする？」
「え・・・・・・・」
　ティグルの言った事が理解出来ず、サーシャは呆けた顔をするが、暫くして突然笑いだした。
「アッハハハハハ!!　何それ!?　本気で言ってるのかいティグル？」
「・・・・・・・、だったらどうなんだよ」
　恥ずかしそうに頬をかくティグルを見て、サーシャは更に笑い出す。
「アッハハハハハ!!　捕虜になった貴族が、敵国の人間に、領地を担保に身代金の肩代わりを要求するなんて、そんな話聞いた事無いよ!!　アハハハハハ!!」
　暫く笑い続け、やっと笑いが収まったサーシャは目尻に浮かんだ涙を拭ってティグルに向き合う。
「全く。君という奴は・・・、本当に型破りと言うか、常識はずれと言うか」
「それは俺も自覚している。でも実際の所、俺はアルサスの平和が守られるんであれば、アルサスがジスタートの物になっても構わないと思っている。で、どうなんだ？　サーシャ」
「前向きに検討させてもらうよ。大好きな人の為にもね」

「本当か!?」
「勿論!」
そして、お互いに心底嬉しそうに笑顔を浮かべながら、ティグルとサーシャは再び抱き合い、キスを交わし、そのまま夢の世界へと旅立った。

翌日、昼過ぎになっても起きてこないティグルを起こす為に部屋を訪れたエレン達が、抱き合う様に眠る二人を発見し、昨日以上の騒ぎになったのは言うまでもない。

若者は守るべき物の為に立ち上がる

ティグルＳｉｄｅ

「ふ～っ。いよいよ二日後、か・・・」

身代金の期限が目前に迫った俺の頭には今、ジスタートでサーシャやエレン達と過ごした日々が走馬灯の様に、現れては消えていった。

サーシャと互いに思いを伝え合った翌日、俺達はその事をエレン達に話した。その時の皆の様子は、呆然とするもの、複雑そうな顔をするもの、微笑ましそうな顔をするもの、と様々だった。

その後、一緒に朝食を食べて、また少し話した後、ミラ、リーザ、ソフィー、ティナはその日の内に自分の公国に帰った。

サーシャだけは「元々長期間、公国を留守にするつもりで、その旨も伝えてある」との事で、今もライトメリッツに滞在している。

それからは色々な事があった。

まず最初に思い付くのはルーリックの事だ。ルーリックがアルテミシアさんの手紙をもってきてくれた日の翌日、彼は自分の髪を全て剃った。曰く、俺の慈悲で罪自体は

不問になったが、自分自身が納得出来なかったから。との事だ。これには俺は勿論、エレンを始めとした戦姫全員、そしてリムまでもが唖然とした。

次に、公宮内で俺に接する人間の態度にも変化があった。無論、俺をよく思わない奴は今でもいるが、来た当初に比べれば格段と減り、逆に俺に話し掛けてくる者や、弓の教えを請う者が増えた。因みに俺に話し掛けてくる者の約四割は公宮の侍女で、内容は俺とサーシャの関係についてが殆どである。エレンも言っていたが、彼女達は本当にそういった話が好きなんだな、と思った。

他にも、ルーリック達と一緒に弓の鍛錬をしたり、サーシャやリムから政を教わったり、サーシャと一緒にお忍びで城下町に行こうとしたエレンを発見し、三人で町を見て回ったり、俺が弓以外に使える武器が無いか試した時に誤ってエレンの胸を・・・んっんん!!　体を流そうとして、エレンが飼っている幼竜のルーニエと出会い、その後、エレンとサーシャのはだkゲフンゲフン!!　と、とにかくいろんな事があった。

本当にここは居心地のいい、優しい場所だと俺は思う。捕虜という立場故に行動の制限はあるものの、起きるのは自由だし（と言っても最近はサーシャに起こされるが）、食事もおいしいし、俺の弓の技量をこの上なく評価してくれるし、何より、俺の初恋の相手であるサーシャがいる。

だけど・・・、

「それでもやっぱり、俺はアルサスが、ティッタやバートラン達が一番大切だ」
だからこそ俺は何としてもアルサスに帰らなければならない。その為には、やはり身代金を払う事が第一条件だ。
「とは言ったものの、流石にあの金額は厳しいよな…。やっぱり当初の予定通り、サーシャを頼るしか無いか・・・」
俺が身代金の事で頭を働かせていると・・・。

コンコン

「ん？」
誰かが俺の部屋の扉を叩いた。
（こんな時間に、誰だ？）
俺は怪訝に思いながら、扉を開けた。
「ルーリック？」
「おお、起きていらっしゃいましたか」

扉の前には、燭台をもったルーリックがいた。
「ティグルヴルムド卿に会いたいと言う者がおりまして・・・。出来るだけ音を立てぬ様、ついて来ていただけますか？」
ルーリックの言う事に首を傾げながらも、俺は彼についていった。

これがやがてアルサスだけでなく、ブリューヌ全土を巻き込む戦いの幕開けとなるとは、この時の俺には想像も出来なかった。

ＮｏＳｉｄｅ

ルーリックに連れられ、ティグルは巡回の兵達に見つからない様、慎重に進んで行き、やがて訓練場に辿り着いた。
訓練場では数人の兵士に囲まれて、一人の老人が座り込んでいた。その老人の顔に、ティグルは覚えがあった。
「バートラン！」
「若！」

ティグルと老人は歓喜の表情を浮かべながら互いに手を取り合う。
「若！　よくぞご無事で！」
「お前こそ！　無事で本当によかった！」
「やはり、ティグルヴルムド卿のお知り合いでしたか」
「ああ。皆！　本当にありがとう。バートラン、マスハス卿は？　ティッタは？　アルサスは大丈夫なのか？」
「そうだ！　それどころじゃねぇんです若！」
「え？」
「テナルディエ公爵の軍勢が、アルサスに向かっとるんです！　数は三千」
「何だと!?　どういう事だ!?」
「わしには、よう分かりませんが・・・」
バートランは懐から一通の手紙を取り出し、ティグルに差し出す。
「マスハス様から手紙を預かっとります」
ティグルは手紙を受け取ると、急ぎ中を見る。
手紙には身代金を用意出来なかった事への謝罪、とりあえずアルサスが平穏である事、ティッタが毎夜神殿でティグルの無事を祈っている事等が書かれており、その後はテナルディエ公爵がアルサスを焼き払うべく、三千の兵を差し向けた事。更にそれを

知ったガヌロン公爵が先んじて兵を動かそうとしている事が書かれていた。
　手紙の主であるマスハスはガヌロンを抑えるので精一杯なのでどうにか戻って来てほしい。という言葉で締めくくられていた。
「やりたい放題、という訳か！」
　溢れ出んばかりの怒りを表すかの様に、ティグルは手紙を握り潰す。そんなティグルの様子に、ルーリック達は沈痛な顔を浮かべる。
「ティグルヴルムド卿、お気持ちはお察しします。ですがどうか部屋にお戻りください」
「悪いが、それは聞けない」
　ティグルは立ち上がり、城門に向けて歩き出すが、すぐに兵達に囲まれる。
「お戻りください！　手荒な真似はしたくありません。戦姫様も仰っていたでしょう!?
　城門に近づけば死刑だと」
「分かっている！　その上で、俺はここを出ると言っている」
　ルーリックは語気を強めてティグルを止めようとするが、逆にティグルの凄みを帯びた声に圧倒され、道を開けてしまう。
　道を開けてくれたルーリック達にティグルは軽く笑いかけ、再び城門に向けて歩き出した。
「随分騒がしいと思えば・・・」

「こんな夜更けにどこに行く気だい？　ティグル」
　城門の方を見ると、そこには腕を組みながら門に背を預けるエレンと、そのすぐ近くに立つサーシャがいた。
　二人の服装は昼間に着ていた服装であり、二人の腰にはそれぞれの竜具が収まっていた。
「通してくれ。俺はアルサスに帰らなければならない」
「自分の立場を忘れてしまったのか？」
「テナルディエがアルサスに三千の兵を差し向けた。町が焼かれてからでは遅いんだ！　頼む！　全てがすんだら必ず戻ってくる。だから俺を行かせてくれ！」
「・・・・・・。アルサスに行って、お前は何をするんだ？」
「何をって・・・、領民を守るに決まっているだろ！」
「どうやって？」
「え？」
「ティグル。君の弓の技量はよく知っている。だけど、たった一人で何が出来るというんだい？　三千の敵にたった一人で挑もうなんて、無謀なんてレベルじゃないよ」
「分かっている!!」
「ならどうする？　何か方法があるとでも言うのか？　三千の敵を倒す方法が」

アリファールを突きつけながら投掛けられるエレンの問い。
その問いにティグルは・・・、

「ああ、ある」

確固たる決意の籠った声で答えた。
「何？」
「え？」
予想外の答えに、エレンとサーシャは怪訝な顔をする。

「三千の敵全てを倒すのは厳しいかもしれないが、少なくとも、総大将を打ち取って、敵を瓦解させる事くらいは出来る筈だ」
　ティグルの告白にエレン達は勿論、ルーリック達やバートランも戸惑いを隠せない。ティグルが嘘を言っているとは思えないが、それでも彼の言う事が信じられなかった。
　そんな中、思案を巡らせていたサーシャが、何かに気付いた様にハッとする。
「まさか・・・、あの力を使うつもりなのか？　ティグル・・・」
　サーシャの言葉に、ティグルは一瞬目を見開くが、直ぐに表情を戻す。
「ああ、そうだ」
「あの力？　サーシャ、お前何か知っているの・・・、サーシャ？」
　エレンが振り向くと、彼女の紅い瞳に、寂しそうな、不安そうな表情の親友の姿が映った。
「ティグル・・・、君はあの力の事をどこまで知っているんだ？　君はちゃんと力を制御する事は出来るのか？」
「・・・・・・・・・、正直言うと、俺はあの力について何も知らない。力自体も、四年前のあの時以来、一度も使っていない」
「・・・・・・・、だったら尚更、今の君を行かせる訳にはいかない」
　サーシャはバルグレンを抜き、右手に持つ紅蓮の刃をティグルに突きつける。

「っ！　・・・・・・、どうしても、通してくれないのか？　サーシャ」
「ああ。今君をアルサスに行かせれば、僕は間違いなく後悔するからね」
「え？」
「ティグル。前に僕達戦姫が使う竜具（ヴィラルト）には竜技（ヴェーダ）と呼ばれる強力な技がある、という事は話したよね？」
「ああ。それがどうかしたのか？」
「僕は昔、エレンにこう言った事がある。『竜技（ヴェーダ）の濫用は自重するように。頼ってばかりいては心も技も弱くなる』今の君が正にそれだ」
　サーシャの言葉にティグルは目を見開く。
「君がアルサスを大切に思っているのは分かる。そんなアルサスを焼こうとするテナルディエ公爵には僕も憤っている。でも、だからと言って一人で、しかも出自も制御出来るかも分からない様な力に頼ろうとしている君を行かせて、もし君に何かあったら、僕は一生自分を許せなくなる」
　真っ直ぐな瞳で自分を見つめるサーシャに気圧され、ティグルは視線を逸らしてしまう。
「何故一人で抱え込もうとするんだ？　どうして知恵を絞らない？　エレンも言っていた。君はディナントで、圧倒的不利な状況を少しでも良くしようとしたと。そんな君が

どうして感情任せに動こうとするんだ？」
「サーシャ？　何を言って・・・、っ！」
サーシャの言葉に戸惑いながらも、ティグルは何かに気付く。
（そういえば、何故エレンは何もしてこない？　ルーリック達の命じて、俺を取り押さえる事も出来るのに・・・）
サーシャとエレンを見つめながら、思考を巡らせるティグル。
やがて一つの答えに辿り着き、ハッとした表情でエレンを見る。
（エレンは俺にチャンスを与えてくれようとしているのか・・・）
次にティグルは視線をサーシャの方に向ける。
（そして、そのヒントは恐らくあの言葉・・・）
「エレン、サーシャ。頼みがある」
ティグルは二人に頭を下げる。
「俺に力を、兵を貸してくれ！」
ティグルの言葉にルーリック達は驚きを禁じ得なかった。捕虜の立場にある人間が兵を貸せと言うなど、前代未聞であった。
「ハッ・・・、ハハッ・・・、アッハハハハハハハハハ!!」
ティグルの申し出に、エレンは腹を抱えて大爆笑し、サーシャは「本当に君らしい」と

でも言う様な顔で、ティグルに微笑みかけていた。
「いやはや、何とも清々しい程に図々しいな、ハハッ」
　笑いを治めたエレンが目尻に浮かんだ涙を拭い、嬉しそうな表情でティグルを見る。
また、主の気持ちを表すかのように、風が楽しそうにそよぎ、バルグレンからは温かな、優しい光が発せられる。
「貸せと言うか。良いだろう。だが当然タダではないぞ」
「・・・・・・、いくらだ？」
「アルサス全土」
「公正な統治を。領民の安全な生活を保障してくれるなら」
「決まりだな。で、お前は何を要求する？　サーシャ」
　楽しそうな顔でエレンはサーシャに視線を移す。
「僕は、そうだね・・・、全ての戦いが終わった後、僕の頼みを何でも一つ聞いてくれる事。それで良いよ」
「何を要求する気なんだ？」
「それはまだ秘密だよ。その時になったら教える。だから、君にはその時までちゃんと生きててもらうよ？　ティグル」
「ああ、分かった」

「そちらも決まったな」

エレンは鞘に納まっていた銀閃を抜き、天に掲げ、高らかに号令を下す。

「黒竜旗（ジルニトラ）を掲げよ！　戦いだ！」

若者は頼もしき戦友と共に帰還する

ＮｏＳｉｄｅ

エレンの指揮の下、一千の兵がアルサスへ向かう。その中にはエレンとリムは勿論、ティグル、サーシャ、ルーリック、バートランの姿もあった。

「敵は三千！　こちらは一千！　勝てると思うか!?」

「奴らは地理に昏（くら）い！　テナルディエ家の人間がアルサスを訪れた事はここ数年無い！　俺はアルサスの山野は殆ど知っている！」

「それに連中はアルサスを盛り場くらいにしか思っていない筈だ！　マトモな反撃や抵抗があるとは夢にも思っていないだろう！」

馬を駆りながらのエレンの問いに、ティグルが答え、サーシャが自分の意見を加える。

「地の利有りか」

エレンは不適な笑みを浮かべる。ふと視線を移すと、ティグルが自分をジッと見つめている事に気付く。

「見惚れるのも良いが、言葉の一つぐらい掛けたらどうだ？　綺麗だ、とか」

「ディナントで再会した時からずっと思ってたよ、それは」

「っ！　そ、そうか・・・」
　からかうつもりでかけた言葉に、予想外の答えが返って来て、エレンは思わず頬を赤く染める。
「むぅ・・・」
「あっ！　そういえばサーシャ！」
「えっ!?　なっ・・・、何だい？　ティグル・・・」
　サーシャが少し拗ねたように頬を膨らませていると、突然ティグルに声をかけられ、慌てて顔を元に戻す。
「その髪飾り、まだ付けててくれたんだな。似合ってるよ！」
「っ！　覚えててくれたんだ・・・」
　今度はサーシャが顔を赤く染めながら、右手で髪飾りに触れる。
　そんな遣り取りを経て、ティグル達はアルサスを目指し、馬を駆る。

アルサスの中央都市セレスタでは現在、迫り来るテナルディエ軍に備えて、住人達の避難が行われていた。

マスハスの指示を受けた兵士や侍女のティッタの指導の下、町の外へ出た事がある者と体力がある者は郊外の森や山へ。そうでない者や老人、子供は神殿へと避難していく。

そんな中、ティッタはただ一人、屋敷でティグルの帰りを待っている。主のいない屋敷の中で、ティッタは部屋の一角に飾られた家宝の黒弓を瞳に映す。

ティッタの脳裏にティグルが戦に向う日の朝、彼と交わしたやりとりが浮かぶ。

「ティグル様・・・」

黒弓を抱き締めながら、ティッタはティグルの無事と帰還を信じ、祈った。

そんな彼女の思いを踏みにじるように、テナルディエの軍勢がセレスタの町に攻め入る。

セレスタの町に侵入したテナルディエの兵達は、欲望のままに暴れ回る。家屋を破壊

し、金品や食料を奪い、火を放つ彼らの所業は正しく蛮族のそれであった。
彼らの指揮官でありテナルディエ家の長男であり次期当主、ザイアン＝テナルディエは、セレスタの町から少し離れた場所にある丘の上から、兵達に蹂躙される町を眺めながら、下衆な笑みを浮かべていた。
また、彼の後ろには、父フェリックス＝アーロン＝テナルディエから送られた飛竜（ヴィーフル）と地竜（スロー）、二頭の竜が控えていた。
少しして、兵から町に住人がいない事を聞かされたザイアンが悪態をつきながらふと視線を動かすと、彼の目にティグルの屋敷が映る。
ザイアンは部下に兵の指揮と竜を任せ、一人軍を離れ、ティグルの屋敷に向かう。

屋敷の一階から物音に、ティッタは体を震わせるも、弓を抱き締めて勇気を振り絞り、廊下に出て、階段を下り、広間の方を見ると、そこには鎧を着た青年、ザイアンが立っていた。
気丈に振る舞い、強い口調でザイアンを追い出そうとするティッタ。そんな彼女にザイアンは剣を抜き、襲い掛かる。
必死に逃げるが、遂にバルコニーに追いつめられてしまうティッタ。逃げる途中で手

にしたナイフをザイアンに向けて突きつけるが、ザイアンは何事も無いようにそれを剣で弾き、更にそれと同時にティッタの胸元が露になる。

恥ずかしさと怒りで顔を赤くし、胸元を隠そうとするティッタ。

バルコニーで押し倒されたティッタにザイアンの魔手が伸びようとしたその時、何かが風を切る音と共に、ザイアンの右手に謎の衝撃が走り、上に伸び上がる。

突然の出来事にザイアンは惚けた顔になるが、謎の衝撃の正体を知るべく、右手を見上げると、彼の顔に赤い何かが落ちてくる。

そして、視線を右手にやると、ザイアンの右手には一本の矢が貫通していた。ザイアンは理解する。謎の衝撃の正体が自分の右手に矢が突き刺さった時のモノだという事に。顔に落ちて来た赤いモノが自身の血である事に。全てを理解すると同時に、右手を射抜かれた激痛がザイアンを襲う。

あまりの痛みに叫び声を上げ、右手を抑えながらザイアンは後ろに倒れ込む。

「跳べ!!　ティッタ!!」

ティッタの耳に、彼女がずっと待ち望んでいた人物の声が聞こえた。
声のした方を見ると、二頭の馬と、それに乗り、一直線にこちらに向かってくる二人の男性が目に映った。
二人のうち、前を走る赤い髪の青年、ティグルの姿を見たティッタは目に涙を溜め、弓を抱え、バルコニーから飛び降りる。
一方、ティグルは全速力で馬を走らせ、屋敷を目指す。
しかし、その途中で潜んでいたテナルディエ軍の兵の横槍を躱した拍子に、馬がバランスを崩してしまう。
テナルディエ兵はティグルと共に来た禿頭の騎士、ルーリックの放った矢に討ち取られ、バランスを崩したティグルは鞍を踏み台にして跳び、空中でティッタの体を抱き締める。

　ティグルとティッタが地面に激突しそうになったその時、エレンがアリファールを振るうと同時に起こった風が転びそうになった馬の体を起こし、風はそのまま二人を優しく包み込み、ティグルとティッタは舞い落ちる木の葉のようにふわりと地面に着地する。
「全く、無茶をするモノだ。恩に着せるつもりは無いが、私がいなかったら二人とも大怪我では済まなかったぞ?」
「当てにはしていた。でも助かったよ。ありがとうエレン。・・・・・・っ！　そうだ、ザイアン」
「ザイアン?」
「テナルディエ家の長男で、次期当主だ。そして恐らく・・・」
「連中の指揮官。と言った所か?」
　屋敷のバルコニーを睨みつけながら、ティグルは頷く。
「敵の親玉が屋敷にいる。突入せよ!」
　エレンの命を受け、ルーリックが先頭になり、ジスタート兵が屋敷に突入する。
「ティグル様・・・」
「っ！　ティッタ・・・」
「ティグル様!!」

弓を抱え、目に涙を溜めて、ティッタは縋り付くようにティグルの胸に飛び込む。
「信じてました・・・。必ず、必ず帰って来てくださると・・・。ティグル様ぁ・・・」
「心配かけたな。けど、もう大丈夫だ。それよりお前、どうしてその弓を？」
「あ、これは・・・、その・・・、もしもの時、これだけは持ち出そうと・・・」
「バカ！　こんな物放っといてさっさと避難すれば・・・」
「出来ませんそんな事!!」
ティッタは足を振るわせながらも、強い口調で抗弁する。
「あたしはティグル様にお屋敷の留守を任されました！　逃げるなんて出来ません！でも・・・」
大粒の涙をこぼしながら抗弁するティッタを、ティグルは再び抱き締める。
「そっか・・・、ありがとう。ティッタ」
やがて、ティッタの顔に笑顔が戻る。
「おいおい、見せつけてくれるな。サーシャが見たら焼くぞきっと」
馬上からのエレンの冷やかしにティグルは苦笑いを浮かべる。
「ティグル様、この人達は一体・・・」
辺りを見渡しながら、ティッタは不安そうに尋ねる。
エレン達の事を説明しようとした時、ティグルの目がある者を捉える。

刹那、物陰から矢がティッタに向けて飛来。ティグルはそれを左手で掴み、自身の弓につがて物陰に向けて放ち、潜んでいた敵兵を射倒し、ジスタート兵達から感嘆の声が上がる。

「つっ・・・」

左手に痛みが走るのを感じたティグルが手のひらを見ると、矢を掴んだ時についたと思われる、横に広がる傷から出血ていた。

それを見たティッタはスカートの一部を破り、それをティグルの手にきつく巻く。

「大丈夫か？」

「問題無い、やれる」

ティグルの答えを聞き、笑みを浮かべるエレン。

「黒竜旗（ジルニトラ）！」

エレンの宣言と共にジスタート兵が、軍旗を掲げ、それを見たディナントの戦いに参加したテナルディエ兵達は悲鳴を上げ、次々に逃げ出す。

「散々好き勝手に略奪の限りを尽くし、罪無き民達を傷つけておきながら、いざ自分達より強い相手が出て来たら我先に逃げ出すなんて、正に盗賊の所業だね」

突如聞こえてきた声と共に、何かがテナルディエ軍の中を通過し、同時に兵達の体から血が噴き出し、崩れ落ちる。
「見ていて虫酸が走るよ」
声の主、バルグレンを構えたサーシャはその瞳に怒りを宿し、テナルディエ軍を睨みつけ再度突撃、次々と兵を斬り捨てる。
「突撃！　サーシャと共に敵を追撃せよ！」
エレンの掛け声と共に、ジスタート兵達は武器を構え、テナルディエ軍を追撃する。
「ティグル、追うぞ！」
「おう！」

エレン達に続き、敵を追撃しようとしたティグルがふと自分の持つ弓に目をやると、弓に大きな亀裂が走っているのを見つける。
（ティッタを助けた時か・・・。どちらにせよ、これじゃあ使えない。どうすれば・・・）
「ティグル様、これを」
ティッタが抱えていた家宝の黒弓をティグルに差し出す。
「こいつは・・・」
それはヴォルン家の家宝であり、何よりティグルにとって、文字通り特別な弓だった。

（四年前、俺はこいつと共にジスタートを巡り、そしてあの時、俺はこいつの力を使い、サーシャを救った）

ティグルは四年前、ジスタートに発つ時、父からこの弓を持たされ、こう言われた。
『良いか？　決してこの弓を手放してはならない。旅の途中、常にこれを手元に置いておくのだ。分かったな？』
そしてジスタートから戻り、父に弓を返した時に言われた事を思い出す。
『この弓、そしてその力を徒(いたずら)に使ってはならない。今後この弓を使うのは本当に必要とした時のみだ』
（そして、今がその時！）
ティグルはティッタから黒弓を受け取り、代わりに亀裂の入った弓を手渡す。
四年振りに手入れ以外の目的で手に取った弓の感覚を確かめるように、ティグルは弦を軽く弾く。
一月以上放置していたにも拘らず、確かな弾力が指に伝わる。
（やっぱり馴染む。あの時同様・・・、いや、それ以上に！）
弓を握りしめ、ティグルは決意する様に誓う。
（父上。俺は嘗てサーシャを、初恋の女性を守る為にこの弓の力を使いました。そして今、今度はアルサスを守る為にこの弓を使います！）

「若〜!!」
「「バートラン（さん）!!」
　馬に乗ったバートランがこちらに向かって来るのが見えたティグルとティッタは手を振り答える。
「若！　ティッタ！　無事でしたか！」
「ああ。バートラン！　ティッタを頼む」
「分かりました。さ、ティッタ」
「はい」
　バートランの馬に乗ったのを確認したティグルは黒弓を掴み、自身の馬に騎乗し、エレン達の後を追う。
「ティグル様、どうかお気を付けて」
　バートランの後ろで、ティッタはティグルの無事を祈った。

　そして、エレン達と合流したティグルは共闘しセレスタの町からテナルディエ軍を追い出し、逃げ延びた兵達は本隊と合流。
　ザイアン率いるテナルディエ軍と、ティグル、エレン、サーシャ率いるジスタート軍は、モルザイム平原にて激突する。

そして若者は竜を射る

サーシャＳｉｄｅ

セレスタの町での戦いから数刻後、僕達は現在、モルザイム平原にてテナルディエ軍と対峙している。

町で打ち取った敵兵は三百。追撃を逃れた敵兵と敵の司令官は本隊との合流を果たした。

総数が三千と言うのが本当なら、敵は現在二千七百。僕達は一千の内、百騎を町の守備に回した為、現在九百。依然として三倍の差は変わらない。

ティグルは敵がモルザイム平原まで逃げると予想。彼曰く、そこならば突進力と貫通力に優れたブリューヌの騎士の力を最大限発揮出来るらしく、僕達はそこで敵を迎え撃つ事にした。

兵は僕とティグルとエレンが四百を率い、残りをリムが率いる。

「怖いかい？」

自分達の三倍の敵を目の当たりにして、僕は隣にいるティグルに尋ねる。
「怖いな。・・・でも、負ける気はしないな」
「僕もだよ、ティグル」
自信に満ちた笑みを浮かべて答えるティグルに釣られて僕の頬も緩む。
「嬉しそうだな、サーシャ」
「エレン・・・。うん、そうだね。僕は今凄く嬉しいよ。こうして君と、ティグルと轡(くつわ)を並べて戦えるのが」
「ふっ、そうか。私もだサーシャ」
エレンは満足そうな顔をした後、アリファールを抜き、高々と掲げる。やがて笑みを消し、掲げた剣を鋭く振り下ろす。
「突撃!!」
さあ、ティグル(僕の大好きな人)の大切な物を傷つけた報いを受けろ!!

ＮｏＳｉｄｅ
エレンの号令と共に、戦いの火蓋が切って落とされた。
ジスタート軍の騎兵四百が大地を蹴り、テナルディエ軍に向けて進軍する。

対するテナルディエ軍の第一陣は槍を構え、ジスタート軍に向けて矢を放つ。
「アリファール!!」
ジスタート軍の先頭を走るエレンが剣を振るうと風が吹き、敵の矢を全て蹴散らす。
その後ろでティグルは矢を三本同時に弓につがえ、一気に放つ。ティグルの放った三本の矢はそれぞれ敵兵の頭を射抜き、射抜かれた敵兵三人は力なく倒れる。
「つくづく常識はずれな弓の腕前だなティグル!」
「それは褒め言葉として受け取るぞエレン!」
「それで良い!」
エレンの冗談を軽く流しながら矢を放つティグル。
「うぉおお!!」
「!!」
その時、側面から敵兵がティグルに向けて斬り掛かる。
「ぐあっ!?」
「悪いけど、ティグルには指一本触れさせないよ」
しかし、不意打ちを仕掛けた敵兵は、ティグルの傍らに控えていたサーシャによって打ち取られる。
「油断大敵だよティグル。もう少し後ろにも気を使ってくれ」

「助かった。でも、俺の後ろはサーシャが守ってくれるから、何の心配もいらないさ」
屈託ない笑顔で言うティグルに、サーシャは呆れ半分嬉しさ半分、と言った顔で微笑む。
「全く君って奴は・・・。エレン！　後方は僕に任せて、君は突き進め！」
「ああ！　そうさせてもらうぞサーシャ！」
サーシャに後押しされ、エレンは敵軍に向けて進んでいく。
テナルディエ軍はエレンに向けて槍を突き出すが、エレンはそれを巧みに避け、アリファールを振るい、次々に敵を打ち倒していく。
一方、後ろでは、ティグルが弓を引き絞り、敵の軍旗や指揮官、遠くの弓兵を狙い撃ち、サーシャは常にティグルの傍らに控え、ティグルに襲い来る敵兵を打ち取っていく。
エレン達の活躍により、テナルディエ軍の第一陣は崩壊。
突破したエレン達の前に主力の騎士隊で構成された第二陣が姿を表す。ここまで勇猛な戦い振りを見せたジスタート軍も、突進力に優れたブリューヌの騎士を前に、徐々に後退を強いられる。
エレン達が第二陣と戦い始めてから暫くして、戦場に角笛の物の様な音が響き、それを合図にするかのように、テナルディエ軍は左右に分かれる。
そして、左右に分かれた騎士達の後方から、黄銅色の鱗を持つ巨大な竜、地竜（スロー）が姿を

現す。
「まさか!?　竜を兵として飼いならしたのか!?」
大地を踏みならし、地竜がジスタート軍に襲い掛かり、ジスタート軍に大打撃を与える。
ティグルは地竜の目を狙い討つが、特殊な膜で保護された地竜の目は傷つく事無く、ティグルが放った矢は弾かれてしまう。
（まずい・・・！　このままじゃ・・・）
正面の竜と左右の騎士隊に阻まれ、ジスタート軍は更に劣勢に陥る。
（こうなったら!!）
ティグルが何かを決心した様に弓を強く握り、矢をつがえようとする。
「駄目だティグル！」
しかし、その手をサーシャが掴み、ティグルを止める。
「サーシャ！　でも・・・！」
「心配はいらないよティグル。ここを持ちこたえれば勝機が見えてくる！」
「え？」
死力を尽くし、何とか踏みとどまろうとするジスタート軍。
その時・・・、戦場に鬨の声が上がる。

「突撃せよ!!」
リムが率いる四百の別働隊が戦場を大きく迂回し、テナルディエ軍の側面を突く。
「よし！　リム達の突撃のおかげで、敵の全身が止まった！」
「言っただろうティグル、勝機が見えてくるって。これで地竜も片付く」
「え？」
「ティグル。特別な力を持っているのは、君だけじゃないんだよ？」
サーシャが視線を向ける先には、地竜と対峙するエレンの姿があった。
「竜とは予想外だった。だから褒美に、ちょっとした技を見せてやる」
エレンに呼応するかのように、アリファールが光を帯びる。
戦場に吹く風がアリファールに集まり、集まった風はやがて小さな嵐となり、更に圧縮され、荒れ狂う暴風の塊と化す。
「大気ごと薙ぎ払え!!」
剣を振り下ろすと同時に、旋風と共に風の刃が地上を掛け、地竜を飲み込み、やがて地竜の体は真っ二つになり、その骸は大地に転がった。
「なっ・・・」
「これで地竜はいなくなった。さあ、反撃だよティグル」
「サーシャ！　今のがもしかして・・・」

「そう。あれが竜具（ヴィラルト）に選ばれし、ジスタートの戦姫のみが使う事の出来る奥義、竜技（ヴェーダ）だよ。その強すぎる力故に、濫用しないように、と言い聞かせてあるんだけど、今回のエレンの判断は正しかったようだね」

「あれが・・・」

骸と化した地竜を呆然と見つめながら、ティグルは改めてエレンやサーシャ達、ジスタートの戦姫の力を目の当たりにした。

地竜が倒れた事を皮切りにジスタート軍の反撃が始まった。

リムが率いる別働隊を攻めるべく、テナルディエ軍の本隊より離れた四百の兵が接近。これを聞いたリムは後退。追撃してきたテナルディエ軍の別働隊は仕掛けられた罠に嵌まり敗走。

地竜が打ち倒された事と、別働隊の敗走の報告を聞いたザイアンは激しく動揺。そんなザイアンの元に後方より約二千の敵が出現した。という報告がもたらされる。

その報告を聞いたザイアンは更に動揺し、第二陣を後退を命令。ザイアンの部下は懸命に考え直すよう彼に訴えかけるが、ザイアンはそれを一蹴。

この時、ザイアンは気付かなかったが、本隊の後方に出現した敵の実際の数は百足らずで、二千というのはライトメリッツからアルサスに来るまでに使用した替え馬だけで

あった。
　ティグルは敵の本隊が布陣する一帯が夕暮れになると山や森の影により、見晴らしが非常に悪くなる事を知っていた為、この策を思い付き、それは見事に的中。戦況を大きく変えた。
　敵の後退に伴い、戦場の流れは完全にジスタート軍のものとなった。
　エレン達は後退する騎士隊に激しく食らいつき、更にリムの率いる別働隊も合流。二方向から攻められ騎士隊は遂に崩壊。エレン達は敵の本隊に辿り着く。

　　サーシャＳｉｄｅ

　途中、予想外の出来事はあったものの、僕達は遂に敵の本隊に辿り着いた。
「この期に及んで、逃げられると思うな！　ザイアン＝テナルディエ！」
　敵の総大将に向けるティグルの言葉には静かな、それでいて確かな怒りが込められているのが分かった。
　当然と言えば当然だろう。彼にとってアルサスはかけがえのない宝だと言っていた。その宝を傷つけられて、怒りを抱かない筈が無い。
「逃げるだと・・・？　バカな!!　国を裏切り、敵であるジスタート軍を招き入れておき

ながら!!　この悪党が!!」
「俺を悪党呼ばわりする前に、自らの所業を省みてはどうだ！」
「何？」
「罪無き民達を苦しめ、家を焼き、財貨を奪う。正に盗賊の所業だ。俺に言わせれば、貴様らの方がよっぽど悪党だ!!」
「民？　民だと？　民がどうだというのだ？　奴らは雨後の茸の様なものだ。戯れに切って捨てようとも時が経てばまた勝手に増える。何を気に掛ける事がある」
「ッ!!」
　敵の総大将の言葉に、思わずバルグレンを握る手に力が入る。
（こんな奴が、国を代表する貴族の片割れだって言うのか・・・）
「下衆だな」
　エレンの言葉に僕は心から同意する。やはりこの国はティグルが忠義を尽くすに値しない。
「俺に貴様の考えは理解出来ないし、するつもりもない。だが一つ、確かな事はある。俺は、俺の領土を荒らし、民を苦しめた貴様らを許すつもりはない！」
「貴様・・・、ぬけぬけと・・・」
　敵の総大将は部下達から槍と盾を強引にもぎ取り、単騎で前に出てくる。

「勝負しろヴォルン！　俺と貴様との一騎打ちだ！」
「血迷ったか」
　僕は呆れた声を発しながら、首を取るべく前に出ようとするが、その前にティグルが無言で馬を進める。
「なっ!?　まさか、やるつもりなのか？　待つんだティグル！」
　ティグルを止める為に慌てて前に出ようとする僕を、エレンが腕を伸ばし、押しとどめる。
「エレン!?」
「やらせてやれ、サーシャ。これはあいつの戦いだ」
「だけど!?」
「大丈夫だ、心配するな。ティグルがあんな奴に負ける筈ない。私達は只あいつを信じればいい」
「エレン・・・。うん、そうだね」
　エレンの言う通り、僕はティグルの勝利と無事を信じて彼を送る事にした。
（必ず勝って、そして無事に返って来てくれ。ティグル）

ＮｏＳｉｄｅ

互いに単騎で前に出たティグルとザイアンはそれぞれ武器を構えながら向き合う。

ザイアンは弓しか持たないティグルを嘲笑うが、ティグルはそれを無視し、ザイアンに向けて矢を放つ。

ティグルの放った矢はザイアンが持つ盾に防がれる。続く二本目、三本目の矢も、同じく盾に突き刺さる。

やがて付き合い切れないと判断したザイアンは槍を構え、馬を走らせ、対してティグルは四本目の矢をつがえ、弓を引き絞る。

刹那、二つの騎影が交差する。

ザイアンの繰り出した槍はティグルの頬を掠め、ティグルの放った矢は今までのモノと同様、ザイアンの持つ盾に突き刺さっていた。

しかし突然、ザイアンが槍を落とし、苦悶の声を上げる。彼の持つ盾をよく見ると、四本の矢は全てほぼ同じ箇所に命中していた。それ故に四本目の矢は盾を貫き、ザイアンの右手を深く抉った。

ティグルはとどめを刺すべく、五本目の矢をつがえる。

しかし、ティグルが矢を放つ前に、ザイアンの配下の兵が彼を守るべく動きだす。エレンも同じく突撃命令を出す。

両軍がぶつかり合う混乱の最中、ティグルは真っ先に駆けつけたサーシャとジスタート兵に守られ、ザイアンもまた、自軍の兵に助けられ、姿を消す。
「全く、一時はどうなるかと思ったよ」
サーシャはティグルの傍により、彼の頬の傷を撫でる。
「切っただけみたいだけど・・・、戻ったらちゃんと手当を受けるんだ。いいね？」
「分かったよ、サーシャ」
「あまり僕を不安にさせないでくれ」
ティグルを気遣うサーシャの表情は、正しく大切な人を思う少女のそれであった。互いに微笑み合うティグルとサーシャ。
その二人の間を、突然強い風が吹く。テナルディエ軍の方を見ると、視線の先から飛竜（ヴィーフル）がザイアンを背に乗せ、翼を広げて空高く飛翔し、戦場を離れていこうとする。
「あの高さでは、風の刃は届かない」
悔しそうな表情のエレンの呟きがティグルとサーシャの耳に届く。
（このまま奴を逃がすのか）
弓を握るティグルの右手に力が入る。

『竜を撃ちなさい』

刹那、謎の声がティグルの頭に響く。
ティグルはその声に聞き覚えがあった。
（今の声・・・、四年前の、あの時の・・・）

『もう一度言うわ。竜を撃ちなさい』

（声の事も気になるが、今はそれよりも・・・！）

気持ちを切り替えたティグルは矢筒から矢を抜き、弓につがえ、引き絞る。

すると、つがえた矢の先端に黒い光が集まる。

それだけではない。エレンの持つアリファール。サーシャの持つバルグレンからそれぞれ銀、赤の粒子が放たれ、ティグルの矢に集まっていく。

「待つんだティグル！　その力を使っちゃ」

「サーシャ」

言い切る前に、ティグルはサーシャの言葉を遮る。

「今ここでザイアンを逃がす訳にはいかない。何より、あいつにはアルサスを荒らした報いを受けさせなければならない」

「ティグル・・・。分かったよ。それが君の決断だというのなら・・・」

サーシャの言葉を聞いたティグルは軽く頷き、再び飛竜に狙いを定め・・・、そして・・・、

ティグルは黒、赤、銀の三つの光を帯びた矢を放った。

放たれた矢は飛竜に向けて一直線に飛んで行き・・・、

ザイアンが乗る飛竜を穿ち貫いた。

穿たれた飛竜は力無く落下し、平原の隅にある沼に墜落。乗っていたザイアン諸共、二度と浮かんで来る事はなかった。

「ティグルヴルムド＝ヴォルンが、ザイアン＝テナルディエを討ち取ったぞ!!」

戦場にエレンの声が響き、ジスタート兵から勝鬨が上がる。テナルディエ軍の兵達は、指揮官ザイアンの死により、戦意を喪失。潰走した。

斯くして、モルザイム平原の戦いはティグル、エレン、サーシャ率いるジスタート軍の勝利に終わった。

そしてこれが、後に英雄として語り継がれるようになる若者、ティグルヴルムド＝ヴォルンの、最初の戦いであった。

戦姫と侍女

ＮｏＳｉｄｅ

ティグル達がテナルディエ軍と激突してから数刻後。すっかり日が落ちたセレスタの町では祝勝の宴が開かれていた。

「ん～、いい風が吹くな、ここは・・・」

「だろ？　俺のお気に入りの場所の一つで、晴れた日はよくここで昼寝をしているんだ」

「確かにここは日当りも風通りも良さそうだし、丁度良い木陰もある。昼寝するにはもってこいだね」

満天の星が輝く夜空の下、ティグル、エレン、サーシャの三人は町外れの小高い丘の上で風に当たっていた。三人の傍には葡萄酒（ヴィノー）の入った酒瓶と杯。酒の肴の乾パンと干し肉があった。

「サーシャ、エレン」

ティグルは座った状態で、二人に頭を下げた。

「ありがとう。二人のおかげでアルサスを守ることができた。本当にありがとう」

「ティグル・・・」

サーシャは優しげな微笑みを浮かべながらティグルを見る。
「安心するのはまだ早いぞティグル」
対してエレンは真剣な表情を浮かべている。
「私はテナルディエがこのまま引き下がるとは思えない」
その言葉にティグルは頭を上げ、頷く。
「そうだな。嫡男であるザイアンを討った俺を、公爵は放ってはおかないだろう」
「ああ。それでティグル、君はこれからどうする？」
ティグルは目を閉じて数秒間沈黙を貫き・・・、
「テナルディエ公爵と戦う」
真剣な表情で答えた。
「・・・・・・、それでいいんだね？　ティグル」
サーシャの問いにティグルは頷く。
「そっか・・・。なら僕達から言う事は特に無さそうだね、エレン」
「うん。一先ずお前のこれからの予定を聞く事は出来た。ならば私達はお前に力を貸す。今はそれで充分だ」
「ありがとう、サーシャ、エレン」
ティグル達に笑顔が浮かぶ。

「さてと、そろそろ戻るとするか」
「そうだな。明日からは町の復興作業も始まるしな」
「ごめん、僕はもう少しここにいたいから、二人は先に戻ってて」
「そうか？　分かった。行くぞティグル」
「ああ」
エレンとティグルは立ち上がり、セレスタの町に向けて歩き出す。

「そろそろ出て来ても良いんじゃないかな？」

そして、一人残ったサーシャは後ろに生えている木に背を向けながら声を掛ける。

「・・・・・・、いつからお気付きに？」

木の裏側からメイド服を着た少女、ティッタが姿を現した。
「僕達がここに来て少ししてからだよ。多分ティグルとエレンも気付いていたと思うよ。敵意が無かったから放っておいたみたいだけど・・・。君は確かティグルの屋敷にいた・・・」
「ティッタです。幼少の頃からティグル様にお仕えしています。アレクサンドラ様、あなたにお訊きしたい事があります」
「ん？　何だい？」

「あなたは、ティグル様の事をどう思っているんですか？」

「好きだよ。僕、アレクサンドラ＝アルシャーヴィンは、ティグルヴルムド＝ヴォルンを一人の女として愛している」

ティッタからの問いかけに、サーシャは間髪入れずに、真剣な表情で答える。

「そうですか・・・」

ティッタは目を閉じて頷く。

「あたしは・・・」

「ん？」

「あたしは、このアルサスの神殿の巫女の娘として生まれました。当時のあたしは巫女の修行が嫌で、お屋敷に侍女として働いている伯母の所へよく足を運んで、その時にティグル様と出会いました。何度もお屋敷に足を運んで、ティグル様と過ごしていく内に、伯母が働いているのを眺めたり、手伝ったりするのが好きになっていきました。1

1歳の時、母にお屋敷の侍女になりたいと伝えた時、母は当然反対しましたが、ティグル様が口添えしてくれたおかげで最終的には侍女になる事を認めてくれました。それからずっと、あたしはティグル様にお仕えしています」

ティッタがサーシャのすぐ近くまで歩み寄ってくる。

「旅から戻ってきたティグル様はジスタートでの話をよく聞かせてくれます。その話の中にアレクサンドラ様、あなたの名前が頻繁に出てきました」

「ふぅん、そうなんだ」

ティッタの言葉にサーシャは頬を緩める。

「あなたの事を話す時、ティグル様はいつも楽しそうにしていました。その様子を見たあるお方がティグル様に訊いた事があります。『その女性の事が好きなのか？』と。そしたらティグル様は・・・」

「ん？　ティグルはどうしたんだい？」

「・・・・・・、頷かれました。顔を赤くして慌てふためいた後。その時、あたし思ったんです、ティグル様にこんな顔をさせる方に会ってみたい。その方がティグル様をどう思っているのか訊いてみたいって」

「それでどうだった？　僕に会って、訊いてみた感想は？」

「・・・・・・、正直、敵わないな。って思いました」

　ティッタは皮肉めいた笑みを浮かべる。
「ティグル様と接していた時間はあたしよりも短い筈なのに、アレクサンドラ様とティグル様の間には確かな絆が結ばれていて、そこにあたしが入る余地は無いと気付きました」
「その口振りから察するに、君もティグルの事を・・・」
「はい。あたしも、ティグル様を、一人の女として、お慕いしています」
「そっか・・・」
　サーシャは満足した様な笑みを浮かべながら、星空を見上げる。
「安心した。ちゃんといたんだね、ブリューヌにもティグルを思ってくれる人が」
「え？」
「ありがとうティッタ。君の話を聞かせてくれて」
　そう言ってサーシャはティッタに視線を向ける。
「じゃあ今度は僕の話を聞いてくれるかな？」
　サーシャは自身の問い掛けに頷いたティッタに微笑み、隣に座るよう促す。
　ティッタは戸惑いながらもサーシャの隣に腰を下ろす。
「まず最初に言わせてもらうと、僕はこのブリューヌと言う国にあまり良い印象を持っていない」

サーシャの突然の告白に、ティッタは目を丸くする。
「剣や槍が不得意で、弓が得意。たったそれだけの事でティグルを否定し、嘲笑う。別にブリューヌ独自の文化や価値観に兎や角言うつもりは無いけど、それでも、それだけに拘り、ティグルの良い所を認めようとしない度量の狭さには心底腹が立つ」
ティッタはスカートの裾を握りしめる。サーシャが語ったそれは、ティッタ自身も昔から抱き続けているものであった。
「加えてあんな他人の領地のとは言え、自国の民を平然と傷つけられる様な下衆が国を代表する貴族の片割れだと思うと反吐が出る」
忌々しそうに空を睨むサーシャ。
「だから僕はティグルにジスタートに来てほしいと願った。ジスタートならティグルは正当な評価を受けられる。エレンも彼を好待遇で彼を迎えると言っていた。でも・・・」
空を睨んでいたサーシャは表情を変え、残念そうな笑みを浮かべる。
「断られてしまったよ。自分には帰るべき、守るべき場所がある。そこを放り出す事は出来ないって」
サーシャが語るティグルの思いに、ティッタの頬が緩む。
「どうしてティグルはこんな国に尽くそうとするのか、僕には理解出来なかったよ。それで一度訊いてみたんだ。そしたらティグルはなんて言ったと思う?」

ティッタは数秒間首を傾げながら考えるが、やがて首を横に振り、サーシャはその時の事を思い出し、笑みを浮かべる。
「ティグルはね、僕にこう言ったんだ。
『俺は別にそこまでブリューヌに忠義立てしているつもりは無い』って」
サーシャから聞かされたティグルの答えにティッタは目を丸くし、そんなティッタの様子を見てサーシャはクスクスと笑う。
「その後ティグルはこう言った。『無論、貴族として必要最低限の忠誠は誓っている。だけど俺にとって一番大切なのはあくまでアルサスだ。何故ブリューヌに尽くすのかと言っていたけど、それはアルサスがブリューヌの領土だからだ』って」
「ティグル様・・・」
困った様な、それでいて嬉しそうな顔をしながら、ティッタはサーシャの話を聞く。
「その後彼はこのアルサスの事を僕に聞かせてくれたけど、その時の様子から彼が本当

にこの地の事を大切に思っているんだと感じた。そしてこうして実際にアルサスを目の当たりにして分かった」

サーシャは微笑みながらセレスタの町を見渡す。

「確かにこれと言った産業は無いみたいだから税収は少なそうだけど、豊かな自然に囲まれていてのどかで、何よりそこに住む人々が活き活きとしている。領民達も領主であるティグルを心から慕っている。ここは本当に良い所だ。だからこそ・・・」

先程まで柔らかかったサーシャの表情が一変、険しくなる。

「どんな理由や考えがあるかは知らないけど、このアルサスを焼き払おうとしたテナルディエ公爵を僕は決して認めない」

僅かな殺気が含まれたサーシャの独白に、ティッタは身震いする。

そんなティッタを余所に、サーシャは続ける。

「恐らく公爵との戦いはこれから更に激しくなっていくだろう。公爵も本気でティグルを潰そうとしてくると思う。でも、絶対にティグルは潰させない。この命ある限り、僕はティグルを支え続ける。彼と、彼の守りたいモノの為に」

己が決意を語るサーシャの姿に、ティッタは畏敬の念を禁じ得なかった。

そして同時にティッタはサーシャに確かな安心感を覚えた。

「・・・・・・、アレクサンドラ様」

ティッタは立ち上がり、サーシャに頭を下げ、サーシャはキョトンとした顔でティッタを見る。
「ティグル様はあたし達、そしてこのアルサスになくてはならないお方です。どうかティグル様の事をよろしくお願いします」
ティッタの思いを感じ取ったサーシャは同じく立ち上がり、ティッタの肩に手を置く。
「君の思い、確と受け取ったよ。僕は戦場でティグルを支える。彼が無事に帰ってこられるように。

そして君も僕と一緒にティグルを支えてほしい、ティッタ」

「え？」
「戦いを終え、疲れ果てた彼を出迎え、戦い以外の日常の中で彼を支える。それが出来るのは他でもない、幼少の頃から彼と共に過ごしてきた君だけだ。ティッタ」
「あ・・・、あたしが・・・、ティグル様を・・・」
　戸惑うティッタに力強く頷くサーシャ。
「・・・・・・、あたしなんかに・・・、出来るんでしょうか？　何の力も無い、あたしに・・・」
「それは違うよ。君だからこそ僕は頼りにしているんだよ。同じティグルを愛する、一人の女として」
「アレクサンドラ様・・・」
　ティッタの目尻に薄らと涙が溜まるが、ティッタはそれを拭い、笑顔を浮かべる。
「はい！　あたし、頑張ります！　ティグル様の為に一生懸命！」
「よろしく頼むよ、ティッタ」
「こちらこそ、よろしくお願いします！　アレクサンドラ様」
「サーシャで良いよ。ティグルを思う者同士、余所余所しい態度は止めてくれ」

「え？　えっと・・・・・・、じゃあ、サーシャさんと呼ばせてもらいます」
「うん、それで良いよ」
　お互いに笑顔で握手を交わすサーシャとティッタ。
　その時、セレスタの町の方から誰かがやって来るのが見えた。
「お～い！　サーシャ！」
「「ティグル（様）！」」
　やってきたのはティグルだった。
「やっぱりまだここにいたのか、サーシャ・・・って、あれ？　何でティッタがここに？」
「え？　えっと・・・」
「僕に話があったみたいで、ずっと待っていたみたいなんだ。それで、さっきまで二人でここで話していたんだよ」
「へ？　ああ、あの気配、あれお前だったのか。サーシャに話って、一体何を話していたんだ？」
「そ、それは・・・」
「それは僕達二人だけの秘密だよ。そうだよね？　ティッタ」
「っ！　はい！」
　仲睦まじく話すサーシャとティッタの様子に、ティグルは首を傾げる。

「二人ともいつの間にそんな仲良くなったんだ？　まあいい。もうだいぶ夜が更けて来たから、今日はもう休もう。明日は町の復興作業もあるしな」
「そうだね。じゃあ行こうか、ティグル」
　サーシャはティグルの傍に駆け寄り、彼の右手に抱きついた。
「なっ、サーシャ!?」
「ん？　何だい？」
「いや・・・、何だいって・・・」
　急に抱きつかれて戸惑うティグルだったが、可愛らしい笑顔を浮かべるサーシャを見て何も言えなくなってしまう。
　ティグルとサーシャの背後で、ティッタが羨ましそうに二人を見ている。
　それに気付いたサーシャは何かを思い付いたような笑みを浮かべる。
「そうそうティグル。君に言っておきたい事があるんだ」
「ん？　何だサーシャ？」

「僕の事もちゃんと忘れずに愛してくれるなら、別に愛人は何人いてもいいからね」

「ぶっ!!」
「ふぇぇっ!?」
屈託ない笑顔で、薮から棒にとんでもないことを言うサーシャに、ティグルは吹き出し、ティッタは顔を赤くして慌てる。
「いい、いきなり何を言い出すんだサーシャ!?」
「いや、ティグルの事だから僕の知らない所でフラグを建ててるんじゃないかな～。って思って」
「何を言っているのかさっぱり分からんぞ!?」
「あ、勿論その人が君に相応しいかどうか、しっかり見極めさせてもらいけどね」
「だから何を・・・って、はぁ～。サーシャ、君が何を思い至ったのかは知らないが、少

なくとも俺は君以外の女性を好きになるつもりは無いぞ」
「ふふっ、ありがとう。でもこれだけは覚えておいてくれティグル。君の事を本気で思っている人間は、案外すぐ近くにいるってことをね」
サーシャはティグルに見えないようにこっそりティッタに向けてウインクし、サーシャの言っている事の意味を理解したティッタは顔を赤くして俯いてしまう。
「ん～、よく分からんが、とりあえずは覚えておくよ。じゃあ行こうか、サーシャ、ティッタ」
「ああ」
「はい」
そして、三人はセレスタの町へと戻っていった。

第二章　魔弾の射手

戦後の朝の一幕

ＮｏＳｉｄｅ

まだ日が昇って間もないうちからティッタは起きて朝食の準備をする。

「ようやく、戻ってきてくださった」

粗方準備が整った所で、ティッタは台所を離れ、屋敷の二階の奥にあるティグルの部屋へと足を進め。部屋の前に立ち、扉をノックする。

「ティグル様、おはよ・・・」

扉を開き部屋の中に入った途端、ティッタの表情が凍り付いた。

室内にあるベッドの上で部屋の主であるティグルが寝ている。これは想定の範囲内である。

問題はティグルの両隣である。

ベッドで眠る彼の隣、右側には黒髪の女性、サーシャが、左側には銀髪の女性、エレンが、ティグルに密着して寝ていた。

目の前の状況に着いて行けず、ティッタの思考は停止する。

「ティグル様ぁぁあああああああ!!!!」

暫くして、屋敷にティッタの叫びが響いた。

「・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・」

食堂内に気まずい空気が流れる。

「いや、すまない・・・。驚かすつもりは無かったんだが・・・」

「どういうつもりだったって言うんですか!?」

鬼気迫る形相で睨みながら声を上げるティッタに、エレンは冷や汗をかきながら体をビクリと振るわせる。

「いや、その・・・、ティグルに用があって来たんだが、どうにも起きないモノだからどうした物かと考えていたのだが・・・」

「あんまり気持ち良さそうに寝ていたから、つい添い寝したくなっちゃって・・・」

「何がつい、なんですか!?」
　困ったように頬をかきながら話すエレンとサーシャに再び声を荒げるティッタ。
「まぁまぁ、落ち着けティッタ・・・。それにしても、こんな朝早くからどうしたんだ?」
　ティッタを宥めながら訪ねて来た用件を聞くティグルに、エレンとサーシャは一息着いた後、口を開いた。
「僕とエレンはこれからジスタートの王都に向かう。陛下に今回の事を報告して、正式に参戦の許可を貰ってくる。只、その後僕はエレンとは別行動を取らせてもらう」
「別行動?」
「ああ、陛下から許可を貰った後、僕は一度レグニーツァに戻る。あまり長く空けていると周りに色々と迷惑をかけるからね。一度戻って、やるべき事を済ませてから改めて合流させてもらうよ」
「そうか。悪いなサーシャ、エレン。二人には本当に世話をかける」
　申し訳なさそうにするティグルに、サーシャは微笑みながら自身の手を彼の手に重ねる。
「ティグル。前にも言ったかもしれないけど、僕もエレンも自分の意志で君に力を貸すと決めたんだ。だからそんなつれない事を言わないでくれ」
　顔を上げた後に映ったサーシャの微笑みと、彼女の言葉に頷くエレンに、ティグルの

頬が緩んだ。
「さて、じゃあそろそろ行こうか、エレン。あ！　そうそうティッタ」
　何かを思い出したように声を掛け、手招きするサーシャに、ティッタは首を傾げながらも近づき、サーシャは自分の近くまで来たティッタにこっそり耳打ちする。
「ジスタートから戻ったら君に面白い物を見せてあげるから楽しみにしててね」
「面白い物、ですか？」
「そっ。この事はティグルには内緒だよ」
「は、はぁ・・・」
　訝しげな表情になりながらも頷くティッタに、サーシャは満足そうに笑みを浮かべながらエレンと共に屋敷を後にした。
「ティッタ、サーシャは何て言ってたんだ？」
「へ？　あっ、えっと・・・、戻って来たらまた色々と面白い話を聞かせてくださると仰っていました」
「ふ～ん、そうか」
　そう言うとティグルは席を立ち、食堂を出て行く。
「面白い物・・・。一体何を持って来てくださるのでしょうか？」
　ティグル達が食べた後片付けをしながら、ティッタはボソリと呟いた。

　ティグルの屋敷を後にしたエレンとサーシャは神殿に向かい、リムとアルサスに残す兵の選抜の件を始め、幾つか言葉を交わした後、彼女に自分達がいない間の事を任せ、自身らはジスタートに向けて馬を走らせる。
　エレンとサーシャがジスタートへ向かうその道中、二人は馬を並べて走っていた。
「ところでサーシャ」
「ん？」
「屋敷を出る前にティッタと何を話していたんだ？」
「ああ、ジスタートから戻ったら面白い物を見せてあげるって言ったんだ」
「面白い物？　一体何を見せるつもりだ？」
「何だと思う？　当ててみなよ、エレン」
　走りながら首を傾げるエレンの様子を見て、サーシャは笑みを浮かべる。
「ん～・・・、分からん。何かヒントをくれ」

「ヒント？　そうだな・・・、僕と君もよく知ってる物だよ。あとは・・・、このお土産はティッタは喜ぶかもしれないけど、ティグルはあまり喜ばないかな？」
　サーシャのヒントにエレンは更に首を傾げる。
（一体何だ？　そもそもティグルが喜ばない様な物を、ティッタが喜ぶのか？　それに私達が知っている物・・・・・・、ん？）
「サーシャ、もしやと思うが土産と言うのは、あれの事なのか？」
「多分エレンが考えている物であってると思うよ」
　微笑むサーシャにエレンは「そういう事か」と言うように溜め息をつく。
「成る程。確かにあれはティッタは喜ぶかもしれんが、ティグルは喜ばんだろうな」
「きっと、と言うより間違いなく驚くよ、ティッタは。

　ジスタートにティグルをモデルにした物語がある。って知ったらね」
「驚くに決まっている。お前や私、あいつらだって驚いたんだからな」
「ふふっ、そうだね。あの時は本当に驚いたよ」
　エレンとサーシャ、二人の脳裏に自分達と他の戦姫達がティグルと再会した日が思い浮かんだ。

「ところでサーシャ、ふと思ったんだが、ティッタはジスタート文字が読めるのか？」
「え？」
「あの物語はジスタート文字で書かれているから、ジスタート文字が読めなければ意味が無いんじゃ・・・」
「あ・・・」
「・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・、ま、まぁ！　いざとなれば僕が読み聞かせればいいだけの事だよ！」
「・・・・・・・・、はぁ～」

物語の裏話と衝撃の事実

ＮｏＳｉｄｅ

時はティグルがルーリックからアルテミシアの手紙を受け取った時まで遡る。夕食を食べ終えたティグル達は昔話を交えた談話を再開していた。

「それにしても本当に驚いたよ。まさかエレンやミラやリーザが戦姫になっていたなんて・・・」

「おいおいティグル。それはさっきも言っていただろう？　また同じ事を言っているぞ。まあ、分からんでもないがな」

「当時の私も、自分が戦姫に選ばれるなんて、夢にも思っていませんでしたからね」

「あら、私は違うわよティグル」

「え？　そうなのか、ミラ」

エレンやリーザとは違った返事をしたミラを、ティグルは意外そうな目で見る。

「ええ。私の場合、母や祖母も戦姫だったから、私もそうなんじゃないかって、何となく思ってたの」

「母や祖母も・・・って、戦姫って世襲なのか？」

「違うわよ」
　さらりと返すミラに困惑しながらティグルはサーシャの方に視線を移し、そんなティグルの様子にクスクスと小さく笑いながらサーシャは口を開いた。
「ティグル、ジスタートの戦姫は竜具(ヴィラルト)が選ぶんだ」
「え？」
　サーシャの言った事がいまいち理解出来ず、ティグルは更に困惑する。
「えっと・・・、サーシャ。それってどういう意味なんだ？」
「言葉通りだよ。竜具が自ら主を選んで、選んだ者の前に現れて戦姫に選ばれた事を告げて、それを受け入れたらその時から選ばれた者が戦姫になる。これがジスタートの戦姫の選定法なんだ。故にジスタートの戦姫は全員その出自が異なるんだ」
「そんな中で私の家は何代にも渡ってラヴィアスに選ばれているのよ」
　サーシャとミラの説明を聞いてティグルは感心する。
「象徴である竜具が自ら主人を選ぶ・・・、なんか不思議だな」
「そうだね。因みに戦姫に選ばれる前の僕は流浪の旅人で・・・」
「私が傭兵団『白銀の疾風(シルヴァイン)』の一員」
「私はとある領主に仕える騎士の娘で・・・」
「私がライトメリッツ貴族の落胤」

「そして私はジスタート王家の傍系の貴族の娘でしたわ」
サーシャが戦姫になる前の自分を話したのを皮切りに、エレン、ソフィー、リーザ、ティナも順に自分の出自を明かした。
「因みにこの場にいないブレスト公国の戦姫、オルガ＝タムはブレスト東端の草原に住む騎馬民族の長の孫娘だったと聞いていますわ」
「オルガ!?」
ティナの口から出たオルガの名前に反応し、ティグルは思わず座っていた椅子から立ち上がる。
「ティグル？　彼女に何か？」
「ティナ。もしかしてそのオルガ＝タムという戦姫の特徴は、薄紅色の髪と黒真珠のような瞳じゃないか？」
「ええ、そうですけど・・・」
「どうしたのティグル？　まさか、彼女とも面識があるとでも言うの？」
「ああ」
ティグルの予想外の返事に質問したミラは勿論、これにはサーシャ達も驚きを禁じ得なかった。
「放浪中、ブレストを訪れた時に彼女、というよりは彼女の身内に馬上での弓の扱いの指

導やアドバイスをしてもらったり、色々と世話になったんだ」
「そ、そうなんだ・・・」
　ティグルとオルガの意外な接点にサーシャ達は苦笑いを浮かべる。
「あらあら、これはつまり、ティグルは七戦姫全員と面識を持っている。という事になるのよね」
「七戦姫全員と面識を持つなんて、テナルディエ公爵やガヌロン公爵でも難しいというのに・・・」
「いや・・・、それについては俺もかなり驚いてる。少なくとも俺が四年前の旅の時に面識を持った戦姫は、アルテミシアさんとサーシャとソフィー、後ティナだけだと思ってたから・・・」
「「「「「「「「・・・・・・・・・・」」」」」」」」
　室内に何とも言えない気まずい空気が流れる。
「そ、それにしても！　あの時は本当にお見事でした。ティグルヴルムド卿」
「あの時？」
　場の雰囲気を変えようと、やや不自然ながらもルーリックが話を切り出す。
「訓練場で戦姫様を狙った刺客を捕えた時ですよ。三百アルシン以上の距離があったにも関わらず寸分たがわず足を射抜いたその技量。まるで魔弾の射手のようでした！」

「魔弾の射手？　それは何だ？」
　ルーリックの口から出た聞き覚えの無い言葉に、ティグルは首を傾げる。
「ご存知ありませんか？　魔弾の射手というのはここ数年ジスタート各地で流行っている類まれな弓の腕を持つ旅人を主人公にした物語のタイトルです」
「へぇ～。ジスタートには弓使いが主人公の物語があるんだな。その辺はやっぱりブリューヌとは違うんだな」
「そうだな。だがルーリックが言った通り、確かにティグルはあの物語の主人公に似てるな」
「そうなのかエレン？」
「ああ。物語の中に、主人公が三百アルシン離れた的に矢を命中させる。という場面があるんだが、昼間のお前の様は正しく物語の主人公のそれに近かったぞ」
「へぇ～。・・・って、どうしたんだティナ？　そんなにニコニコして」
　ティグルがふとティナの方に視線を向けると、何故かニコニコ顔をしたティナがティグルを見ていた。
「ああ、ごめんなさい。予想していた言葉が出てきたのでつい・・・」
「予想していた言葉？」
「ええ。ルーリック、エレオノーラ。あなた達は先程ティグルが魔弾の射手の主人公の

ようだと言いましたね？」
「え？　あ、はい！」
「ああ。それがどうかしたのか？」
「あなた達が言ったことは当たらずと雖も遠からず。正確に言えば逆なんです」
「逆？」
「ティグルがあの物語の主人公に似ている。のではなく、そもそもあの物語自体がティグルをモデルに書かれている。という事です」
「何だって？」
　ティナの言葉に最初に反応したのはエレンではなく、サーシャだった。
「どういう事だヴァレンティナ。あの物語がティグルをモデルに書かれているだって？　もし仮にそれが本当だとして、どうして君がそれを知っている？」
　一見平静を保っているように見えるサーシャだが、内心では驚きを隠せずにいた。
　そんなサーシャの内心に薄々気付いているティナは更なる事実を告げる。
「知ってて当然です。あの物語を編纂したのは他でもない、この私なんですから」
「何だって!?」
　衝撃の事実に今度こそ驚きを露わにし、椅子から立ち上がるサーシャ。
　更にエレン、ミラ、リーザもサーシャと同様に驚きの余り椅子から立ち上がったおり、

リムとルーリックも立ち上がってはいないが、驚きを隠せずにいた。
「それは本当なのヴァレンティナ!?　あなたがあの物語を編纂したって・・・」
「ええ。正確には私一人ではなく、私以外にもあと二人、あの物語の編纂に携わった人物がいますわ」
「誰なんですの？　その二人というのは？」
　ティナを睨むように見るリーザ。そんなリーザを全く気にせず、ティナは平然と話す。
「一人は先代のライトメリッツの戦姫アルテミシア」
「アルテミシア様が!?」
　思わぬ所で自分の嘗ての主の名が出てきた事に驚くルーリック。
「そしてもう一人が・・・」
　途中まで言った所でティナは一度区切り、ある人物に視線を向ける。
「そこにいるソフィーヤ＝オベルタスです」
「何ぃ!?」
「それは本当なのソフィー!?」
　ミラからの問いに対し、ソフィーは困ったように、それでいて愉快そうに微笑んだ。
「どうして教えてくれなかったんだソフィー!?」

「どうしてと言われても・・・。誰も訊かなかったから、としか答えられないわね」
「「「・・・・・・・・・・」」」
　あっけらかんと答えるソフィーを、エレン、ミラ、リーザ、サーシャは非難するように睨み、リムとルーリックは驚きの余り呆然とし、ティナはそんな彼女達の様子を愉快そうに眺めていた。
「え～っと・・・、すまん。状況がよく分からないんだが・・・」
　心底困惑したような表情で手を挙げるティグル。
　そんなティグルに微笑みながらティナが口を開く。
「順序を追って説明するとこうなりますね。まず第一にこのジスタートにはあなたに似た弓使いを主人公にした作者不明の物語があり、それはジスタート各地で読まれている。第二にその物語は元々あなたの四年前の放浪の旅をモデルに描かれていて、物語の編纂者の一人である私はそれを知っていた。最後に私以外に先代戦姫アルテミシアとソフィーヤが編纂に携わっていて、その事を知らされていなかったエレオノーラ、リュドミラ、エリザヴェータ、アレクサンドラの四人が黙っていたソフィーヤを睨んでいる。というのが今あなたが置かれている状況です。お分かりになって？」
「あ、ああ。ありがとうティナ。分かりやすく説明してくれて・・・」
「どういたしまして」

若干表情を引きつらせながらも礼を言うティグルと、再び微笑むティナ。
そんな二人の状況が面白く無いサーシャは口を尖らせながら言葉を発した。
「それよりもヴァレンティナ。どうして君はティグルの旅を物語にしたりしたんだ？」
「確かにそれは俺も気になる。何でなんだ？」
「そうですね・・・。初めはただの余興のつもりでした」
「余興？」
「ええ。ティグル、あなたはアメスの村を覚えていますか？」
アメスの村。その名前が出た時、ティグルは少し目を見開き、同時に当時出会った子供達と、その保護者の女性の姿が、彼の脳裏に浮かんだ。
「ああ。覚えているが、それがどうかしたのか？」
「あの物語のそもそもの始まりは、あの村の教会の子供達が書いた絵本なんですよ」
「なっ!?　あの子達が!?」
「ええ。四年前、あなたに救われた子供達は、救われた恩とその勇姿を忘れまいと、出来事を絵本にしました。それを私と、偶然その場に居合わせたアルテミシアとソフィーヤの二人が目にして、その時にソフィーヤ達がティグルと顔見知りだと知って興味を持ち、子供達に許しをもらって、私達三人でそれぞれ知っている事を文章に起こし、編纂したのがあの『魔弾の射手』です。その後、完成した物語を各々の公国に持ち帰って、そ

れとなく広めたのですが・・・」
　ここでティナは一度区切って、一息つく。
「予想以上に物語が評判になり、気が付いたらジスタート国中に広まっていた。というのが実際の所です」
「そうね。実際私もシアさんも魔弾の射手の流行り具合には流石に驚いたわ」
「因みにですが、アメスの村では現在、あれを読んだ吟遊詩人が作った歌が人気を集めていますわ」
「歌!?　そんな物まであるのか!?」
　エレンが再び驚きの声をあげ、サーシャ達もエレン同様に驚きを露わにしている。
　更にこの事は知らなかったのか、編纂者の一人であるソフィーもエレン達と一緒に驚いている。
「既にオステローデ各地で歌われているらしく、物語同様、国中に広まるのも時間の問題かと」
　何て事無い様に言うティナにどう返していいのか分からないティグルは困った様な顔をする。
「もし私でよろしければ、今ここで歌って差し上げましょうか?」
「えっ?」

「いいのかい？　ヴァレンティナ」
突然のティナからの提案に訝しげな顔をしながら尋ねるソフィーとサーシャ。
「ええ。実は私もあの歌を気に入っているので。それでどうします？」
「どうしますって・・・」
ティグルは頭を掻きながらサーシャ達の顔を見回す。
ティグルにはその顔に「ぜひ聞いてみたい」と書かれているように思えた。
「えっと・・・、じゃあ、お願いしようかな」
「承りましたわ。では・・・」
笑顔で椅子から立ち上がったティナは数回深呼吸をし、息を深く吸い込み、歌い始めた。

ここでは『Ｓｃｈｗａｒｚｅｒ　Ｂｏｇｅｎ』（ＴＶサイズ）をお聞きください。ｂｙ　マシュ・マック。

ティナが歌い終わった後、ティグル達はティナに心からの拍手を送った。

「驚いた。凄く良かったよ、ティナ」
「まさかあなたにこんな才能があったなんて・・・」
　ティグルとソフィーの賛辞に微笑みながらティナは席に着いた。
「ヴァレンティナの歌も確かに良かったけど、この歌も素晴らしい物でしたわ」
「ええ。あの物語にピッタリの。正に名曲と言える物だったわ」
「君の言う通り、確かにこれは間違いなく流行るよ。ヴァレンティナ」
　リーザ、ミラ、サーシャも歌を高く評価している。
「それはそうとティグル。先程から話に出てきたアメスの村というのは何だ？」
「え？　ああ。アメスの村は「待ってティグル」ティナ？」
　エレンの質問に答えようとしたティグルにティナが待ったをかけた。
「実は、私が今回あなたに会いに来たのは二つ理由があるの。一つはあなたをオステローデに迎え入れる事。まあこの話については追い追い進めて行くとして・・・」
「進めんでいい！」
　ティグルの勧誘を諦めていない事をさらりと口にするティナに、エレンが釘を刺す。
「もう一つの理由なんですけど、ティグル。あなたに頼みたい事があるんです」
「頼みたい事？　俺にか？」
「ええ。ティグル、あなたの四年前の旅の話を聞かせてほしいの」

ティナの突然の頼みに、ティグルの思考は一瞬停止した。
「え～っと、ティナ？　何で急に俺の旅の話を聞きたいと思ったんだ？」
「簡単ですわ。あなたが私の歌を聞きたいと思ったのと同じ様に。興味があるからです」
「・・・・・・・・・・」
屈託ない笑顔で答えるティナに、ティグルは困惑する。
「それにどうやらあなたの話を聞きたいのは私だけではないようですよ？」
「え？」
ティナに言われてティグルがサーシャ達の方に視線を向けると、サーシャ達の目がキラキラと輝いていた。
丸で「自分も聞きたい！」と言うように。
「・・・・・・・・・・。はぁ～、分かったよ。ただ、言っとくけど、面白いかどうかは保証出来ないぞ」
諦めたように言うティグルに、サーシャ達は「構わない」と言うように頷く。

こうして、ブリューヌの若き伯爵、ティグルヴルムド＝ヴォルンは自分が四年前の旅

の中で見聞した事を語り始めるのだった。

旅立ちと出会い

ＮｏＳｉｄｅ

朝日が昇ってまだ間もない早朝。ブリューヌ王国の北東に位置するアルサス。その中心都市セレスタの門の前に数名の人影があった。

「それじゃあ、父上、マスハス卿、ティッタ、バートラン。行ってまいります」

必要最低限の荷物を纏めた袋と矢が入った矢筒、黒い弓を持った少年、ティグルヴルムド＝ヴォルン。彼は今日、自分が生まれ育ったアルサスの地を離れ、遠い未知の場所に旅立つのだった。

「ティグル、道中気をつけてな」

「若、旅の無事を心から祈っとります」

「ありがとう。マスハス卿、バートラン」

「ティグル様・・・」

初老の騎士と従者の間を抜けて、目に涙を溜めた少女がティグルの前に現れる。

「ティッタ」

「・・・、必ず、必ず無事に帰って来てください！」

縋るように抱きつくティッタに、ティグルは優しい微笑みを浮かべながら彼女の頭を撫でる。
「約束する。俺は必ずここに帰る。だからお前も体には気をつけるんだぞ」
「・・・・・・、はい」
「ティグルヴルムド」
ティッタの後ろから男性の声が聞こえる。声のした方を見るとそこにはティグルの父、アルサスの現領主、ウルス＝ヴォルンがいた。
「父上・・・」
「ティグルヴルムド、此度の旅がお前にとって実りあるものになる事を、私は切に願っている」
ウルスはティグルをじっと見つめ、自身の右手をティグルの頭に乗せ、優しく撫でた。
「父上・・・。行ってまいります」
父の手が頭から離れた事を合図に、ティグルはウルス、マスハス、バートラン、ティッタに向けて頭を下げてから荷物を背負い、セレスタの街を後にした。
「ティグル様～!!　絶対!　絶対帰ってきてくださいね～!!」
遠ざかるティグルに向けてティッタは精一杯の言葉を送る。
ティグルもそれに応えるように、弓を持つ右手を空に向けて突き出す。

「・・・・・・。それにしてもウルスよ、本当に良かったのか?」
「ああ。この旅から無事に帰還した時、ティグルヴルムドは確実に成長している。あれが本気で将来私の後を継ぎ、アルサスを治めるというならその成長は必要不可欠だ」
「しかし・・・、何もわざわざ隣国のジスタートにやらなくてもよかったのではないか?
それに家宝の弓まで持たせて、もし万が一の事があれば・・・」
「その時はその時だ」
マスハスの言葉を遮るようにウルスは言葉を紡ぐ。
「もしあれが旅の途中で弓を無くしたならば、それもまた運命。少なくとも俺はティグルの成長にはあの弓が必要だと考え、同時にここブリューヌではその成長は成し遂げられないと考えた。ただそれだけだ」
「ウルス・・・」
「何、心配はいらん。あいつは必ず帰ってくる。一回りも二周りも大きくなってな」
「そうか・・・。お前がそういうなら、わしはもう何も言わん。お前がティグルを信じるように、わしもあいつを信じよう」
言葉を交わしながら互いに笑いあうウルスとマスハス。
彼らはティグルの影が見えなくなるまで見送り続けた。彼の成長と帰還を信じて。

ティグルＳｉｄｅ

アルサスを発ってから十日が経ったある日、俺はジスタートを目指し、ヴォージュ山脈を越えようとしていた。

「道が下り坂になってきたってことは・・・、もうジスタートに入ったのか？」

だとしたらここからは少し気をつけて進もう。俺はそう思いながら坂を下り始めた。

しばらく歩いていると、少し離れた所から草の揺れる音が聞こえた。音のした方を見ると、そこには一匹の狐がいた。

「仕留めればしばらくは食べられるな」

矢筒から矢を一本引き抜いて弓につがえ、狙いを定め、矢を放つ。

矢は吸い込まれるように狐に向かって飛んでいき、見事命中した。

「よしっ！」

直ぐさま俺は狐が倒れた所まで行き、狐が息絶えている事を確認すると狐を持ちあげて辺りを見回し、すぐそばに小川の流れた開けた場所を発見。俺はそこで先程の狐を解

体し、食事にする事にした。
俺は狩った狐を毛皮と肉と骨に分け、骨を近くの川の水で丁寧に洗い、数秒ほど手を合わせてから骨を川に流した。
これは昔母上に聞いた異国の猟師の習わしで、猟師が狩った獣に対して自分が生きていく為に命をもらう事への感謝の気持ちを伝える為のものだとか。
骨を川に流した後、俺は火を起こして狐の肉を焼き、十分火が通ったのを確かめてから塩を振って味を整える。
狩った獣の肉を焼いて塩を振っただけの単純な料理。だが俺はこれが好物だった。ちなみに俺は肉では鳥肉が一番好きだ。
食事を終え、残った肉を袋に仕舞い、後片付けを済ませた俺が再び山を下り始めようとした時だった。
「何だ？　向こうの方が騒がしいな。しかもこの音、動物の足音じゃないな。これは・・・、人間？　しかもかなりの人数だな・・・」
通ろうとした道から少し外れた獣道の方から物音が聞こえてきた。その音は普段の狩りの時に聞く動物の足音とは違っていたため、俺はそれが人間の足音だと分かった。
「集団の狩猟者、・・・じゃないな。幾ら何でも音を立て過ぎだ。何かあったのか？」
音の正体が気になった俺はその方に目指し、獣道を進んで行った。

しばらく進むと少し開けた崖のような所に出て、俺はそこから崖下を覗いた。
「あれは!?」
そこには正規兵と思わしき装備を身に纏った三十人ほどの集団が、十人ほどの盗賊と思わしき薄汚れた身なりの集団を取り囲んでいた。
そして盗賊のリーダーと思わしき男が、集団の先頭で女の子を捕まえ、首にナイフを突きつけていた。
その光景を目の当たりにして俺はおおよその状況を理解した。
恐らくあの正規兵と思わしき集団はジスタートの軍隊であの盗賊達を追っていて、盗賊団は女の子を人質にとって彼らから逃げようとしているのだろう。
「完全に囲まれているな。状況的に見て盗賊団が逃げ切るのはほぼ無理だろうけど、いつ盗賊が女の子に危害を加えようとしてもおかしくない。下手をすればやつらはあの子を・・・。よし!」
俺はある事を決意し、行動に移した。

アルテミシアＳｉｄｅ

「近づくんじゃねぇ!!　こいつがどうなってもいいのか!?」
「くっ・・・」
「見苦しいぞテメェら！　お前らは完全に包囲されてる！　もう諦めろ！」
「うるせぇ!!　それ以上近づいたらこいつを殺すぞ!!」
「ひっ！」
「なっ!?　テメェ!!」
「止めなさいアシュリー！」
「でもよセシル!!」
「・・・・・・、どうしますか？　アルテミシア様」
　どうしますか？　ね・・・。それは私が訊きたいわ、セシル。
　まさかほんの僅かな取り逃がしが、こんな事になるなんてね・・・。
「ア・・・、アルテミシアさまぁ・・・」
「大丈夫よミキーシェちゃん。必ず助けるから・・・」
　とは言ったもののこの状況、正しく最悪ね・・・。
「全員武器を捨てて道を開けろぉ!!　こいつがどうなってもいいのか!?」

「うっ、うぅ・・・」
「止めなさい!!」
　どうする？　一度泳がせて・・・、駄目。ここで逃しても、次にミキーシェちゃんを助けられるチャンスがある保証は無いわ。どうしたら・・・。
　ミキーシェちゃんの身の安全を最優先に考えながら、どうにかこの状況を打開しようと思案を巡らせていたその時だった。
　何かが風を斬るような音が響くと同時に・・・、
「ぎゃあっ!!」
「きゃっ!?」
　ミキーシェちゃんを人質に取っていた盗賊が悲鳴をあげると同時に、ミキーシェちゃんを突き飛ばした。
「セシル！　アシュリー！」
　突然に事態に驚きつつも、セシルとアシュリーは私の考えを汲み取って行動してくれた。
　セシルはミキーシェちゃんを保護して、アシュリーは兵を率いながら盗賊の残党を全員討ち取った。
「アルテミシア様!!」

盗賊の残党を無事に討つ事ができ、一安心した私の胸にミキーシェちゃんが飛び込んで来た。
「アルテミシアさまぁ・・・。私・・・、私・・・」
ミキーシェちゃんは涙をポロポロとこぼしながら震えていた。やっぱり怖かったのね・・・。
「大丈夫。もう大丈夫だからね。ミキーシェちゃん」
「ばい・・・!」
未だに震えるミキーシェちゃんの頭を撫でながら、私は先程の事態について思案を巡らせ始めた。
「アルテミシア様、これを」
するとセシルが私に何かを見せてきた。視線を向けるとそれは血の付いた矢だった。
「それは?」
「ミキーシェ様を人質に取っていた男の肩に刺さっていた物です。恐らくこれが・・・」
「盗賊がミキーシェちゃんを解放した原因。と見て間違い無いでしょうね。その矢を射ったのはレオ?」
「いえ。レオとその部隊は今し方合流したばかりで、彼女達も矢など射っていないと言っています」

レオじゃない。じゃあ一体誰が・・・？
思案を巡らせながら辺りを見渡す。すると私たちが今いる場所から二百アルシン程離れた崖の上に人影を見つけた。
「セシル彼女をお願い！　アリファール！」
私はミキーシェちゃんをセシルに預け、アリファールの風の力で崖の上まで飛び上がり、人影を私自身と崖で挟むように着地、アリファールを突きつけながら人影の正体を確認した。
「え？」
予想外の人影の正体に、私は思わず声を漏らしてしまう。
私は人影が盗賊の仲間だと思っていた。けれど人影の正体は・・・、
「子供？」
明らかに盗賊達とは無関係そうな、黒い弓と矢筒、そして旅の荷物と思わしき袋と狐の毛皮を携えた赤い髪の男の子だった。

ＮｏＳｉｄｅ

（え～っと、何でこんな事に・・・？）

赤い髪の少年ティグルは戸惑いを隠せずにいた。

盗賊に人質に取られた女の子ミキーシェを助けるためにティグルが放った矢は彼の狙い通り、盗賊に命中。盗賊はミキーシェを解放し、指揮官と思われる金髪の女性アルテミシアはその隙を逃す事なく盗賊達を一人残らず討ち取った。

それを確認したティグルは安心し、この場を立ち去ろうとした時、突然突風が吹きティグルは思わず腕で顔を覆い、風が止んで腕をどかすと、そこにはさっきまで崖下にいた筈のアルテミシアが目の前にいて、何故か意外そうな顔をしながら自分に剣を突きつけていた。

ティグルは混乱する頭を無理やり働かせ、ある一つの結論に辿り着く。

（もしかして俺、あいつらの仲間だと思われてる!?）

自分たちの兵ではない見知らぬ男が崖の上から矢を射った。状況的にそう思われても仕方ないと考えたティグルは慌てて弓と矢筒と荷物を地面に置いて両手を上げ、なるべく荷物や武器から離れようとゆっくりと落ちないギリギリの所まで下がった。

「えっと、あの、信じてもらえないかもしれませんけど、俺、怪しい者じゃありません。

抵抗もしません。だから、えっと、ひどい事しないでください」
　ティグルの言葉を聞いたアルテミシアはゆっくりと剣を下ろす。
「幾つか質問したいんだけど、いいかな？」
「え？　あっ、はい！　俺に答えられる事であれば、何なりと」
「じゃあまず、君の名前は？」
「ティグルヴ・・・ティグル！　ティグルです！」
「ティグル君ね。じゃあ次、君はどうしてここにいて、ここで何をしていたの？」
「えっと。俺、自分探しの旅をしていて、さっきまでこの近くの川辺で食事をしていて、何か騒がしかったから気になってここまで来て、あなた達があの盗賊らしき連中を囲んでいるのを見つけて、女の子が危ないと思ったので、ここから盗賊を狙って矢を射ました」
「じゃあこの矢を射ったのは君なのね？」
　アルテミシアはセシルから受け取った血の付いた矢を見せながらティグルに尋ね、ティグルはその問いに頷く。
（これと同じ矢羽の矢を持っていることから恐らく言っている事は事実。だけど・・・）
　アルテミシアは自分が持つ矢と、地面に置かれた矢筒の中の矢を交互に見た後でティグルの後ろ、即ち崖下の先程まで自分たちがいた所に視線をやった。

「ここから盗賊達がいた所まではおおよそ二百アルシンはあるわ。にも関わらず君は矢を射ったの？」
「はい。二百アルシンくらいなら、大丈夫だと思ったので・・・」
「・・・・・・・・・・」
　ティグルの言葉にアルテミシアは少し懐疑的な表情を浮かべた。
（確かレオの今の最高記録は二百八十アルシン。だけど・・・）
「君、今幾つ？」
「十二です」
「・・・・・・」
（レオが彼と同じ歳、つまり十二歳の時の記録は確か百アルシン程。つまり彼は当時のレオの記録の倍の距離でも問題無いと言った・・・）
「あの～」
「・・・・・・・・・」
　黙ってしまったアルテミシアにどう対応していいのか分からないティグルはオロオロする。
「セシル！　聞こえる!?」
　すると突然アルテミシアはティグルの後ろに向かって大声で叫んだ。

「聞こえます！　何でしょうか!?」
　今度は崖下から女性の声が聞こえてくる。
「盗賊達が被っていた兜を槍の先につけてそれを立ててちょうだい！」
「はっ!!」
　突然だったにも関わらず即座に動いた事から、ティグルはアルテミシアが部下から信頼されているのだな。と思った。
　そんな事を思っていると、いつの間にかアルテミシアが目の前まで来ている事にティグルは少し驚き、その後すぐ彼女の手の中にある自分の弓に目がいった。
「突然で悪いんだけど、君にお願いがあるの」
「え？　お願い？　俺にですか？」
「ええ。君、さっきここから盗賊を狙って射ったって言ったよね？」
　ティグルは頷く。
「失礼かもしれないけど、私には少し信じられないの。だから証明して欲しいの」
「証明？」
「ええ。あれを見て」
　アルテミシアが弓を持っていない左手で崖下の方を指差す。
　彼女が示した方を見ると、そこには彼女の部下と思わしき茶髪の女性が、先端に兜が

つけられた槍を持って立っていた。
「ここからあの兜までの距離は約二百アルシン。君の言う事が本当ならここからあの兜を狙える筈。それを見せて欲しいの。いいかしら？」
「は、はい・・・。構いませんけど・・・」
「ありがとう」
アルテミシアは一言礼を言ってから弓をティグルに返し、ティグルは弓の弦を数回弾いた後、矢筒から矢を一本取り出し、矢に番える。
（この子・・・）
この時アルテミシアはある事に気付いた。弓に矢を番えた瞬間、ティグルの表情が先程
までの惚けたものから打って変わり、獲物を狙う狩人のように鋭くなった事に。

「なあセシル、アルテミシア様は一体何をするつもりなんだ？」
「突然兜を槍の先につけろって言ってたけど・・・」
一方こちらは崖下。盗賊達を討った後、アルテミシアの部下で、部隊長を務める長い茶髪の女性セシルは、同じく部隊長の灰色の髪の小柄な女性アシュリーと、黒髪の長身

の女性レオノーラの質問を受けていた。
「さあ？　でも彼女には何か考えがある筈よ。なら私は彼女を信じてそれに従う。それで十分よ」
　セシルは質問に答えてからすぐにアルテミシアの指示通り先端に兜がついた槍を立てるように持つ。
「あら？」
「どうしたのセシル？」
　アルテミシアの方に視線を向けたセシルが何かに気付いた事に気付いたレオノーラが彼女に尋ねながら、同じくアルテミシアの方に視線を向ける。
「あれ？　誰かいる」
「あん、誰かだ？　アルテミシア様じゃないのか？」
「ううん、違う。あれ・・・、子供だ。男の子がアルテミシア様の側でセシルの方を弓矢で狙ってる」
「はぁ？　何だそりゃ？」
「成る程。そういう事ね」
　理解出来ないといった顔をするアシュリーとは対照的に、セシルはアルテミシアの指示の真意に気付く。

「多分だけど、ミキーシェ様を人質に取ってた盗賊に矢を射ったのはあの子よ」
「え!?　あの子が!?　あそこから!?」
「バカ言え！　あそこからここまで二百アルシンはあるぞ！　あんなガキにそんな事出来る訳・・・」
「アルテミシア様も同じ事を考えた筈よ。だから確かめようとしているのよ。それが本当なのか否か」
　セシルのその言葉に納得がいったような顔をするアシュリーとレオノーラ。刹那、セシルが槍を持っていた手に衝撃が走る。
　セシル達が慌てて槍の先端を見ると、そこについていた兜が無くなっており、アシュリーの近くには矢が突き刺さった兜が転がっていた。
「なっ!?」
「マジ・・・かよ・・・！」
「ホントに当てた・・・」
　セシル、アシュリー、レオノーラは崖の上の少年ティグルが二百アルシンの距離を物ともせず、標的を狙い撃ちした事に驚きを隠せなかった。

「えっと・・・、これで良かったですか？」
「・・・・・・・・・・」
「ん？」
舞台は再び崖の上に戻る。言われた通り、見事兜に矢を命中させたティグル。
彼がアルテミシアの方を向くと、彼女は驚きを露わにしながら固まっていた。
「あの～」
「え!?　ああ！　ごめんなさい！　ちょっとボーっとしちゃって・・・」
ティグルの呼びかけで気を取り戻したアルテミシアは剣を鞘に収め、ティグルの前まで近づき、彼に向けて頭を下げた。
「ええっ!?」
アルテミシアの突然の行動に、ティグルは驚きの余り、声を上げてしまう。
「君の言った事を疑って、本当にごめんなさい」
「え!?　いやいや別にいいですよ！　俺は全然気にしてませんし！」
慌てふためきながら答えるティグルに、アルテミシアは頭を上げ、優しい微笑みを彼に向ける。
「ありがとう。優しいのね、君」
「え？　いや、そんな・・・。別に俺は・・・」

アルテミシアの微笑みに見惚れたティグルは顔を赤らめながら、恥ずかしそうに頬を掻いた。
「それで、えっと・・・、あなたは・・・？」
「あー　そういえば自己紹介がまだだったね」
アルテミシアは軽い咳払いをして、簡単に身形を整えてから再び口を開いた。
「私はアルテミシア＝ヴィルターリア。ジスタート王国の七戦姫の一人として、ここライトメリッツ公国の公主をしているわ。よろしくねティグル君。」
「ジ、ジスタートの戦姫様⁉　し、失礼しました!!　知らなかったとはいえ軽々しい態度を取ってしまい・・・、本当に申し訳ありません！」
「・・・・・・・・・・」
アルテミシアの立場を知ったティグルは慌てて跪いて謝罪し、そんなティグルにアルテミシアは困ったような、悲しそうな表情を浮かべた。
「あの・・・」
「そんな風に接するのはやめてほしいな」
「え？」
「私、自分の立場を知られて急に余所余所しくされるのは嫌いなの。だからティグル君もさっきみたいに普通に私に接してちょうだい」

「え？　でも・・・」
「・・・・・・・・・・」
「分かりました！　ただ流石に年上に敬語を使わないのはまずいので、そこは勘弁してください！」
「ありがとう！」
　さすがに自分と彼女では立場が違いすぎると思い、申し訳ありませんがそれは。と言おうとしたティグルだったが、無言で涙目になるアルテミシアに思わず即答してしまい、答えたアルテミシアは表情を一変させ、花のような笑顔を浮かべてティグルの手を取り、ティグルはまた顔を赤らめてしまう。
「じゃあ早速だけどティグル君。あなたにお礼をさせて欲しいの」
「お礼、ですか？」
「ええ。あなたが助太刀してくれたおかげで、さっきの女の子、ミキーシェちゃんを無事に救い出す事が出来たわ」
「いや、そんな・・・。別に俺はお礼が欲しくてやった訳じゃ・・・」
「そうはいかないわ」
　アルテミシアからの謝礼をやんわりと断ろうとしたティグルだったが、アルテミシアはそれをバッサリと切り捨てる。

「あの時、もしティグル君が助太刀してくれなかったら、きっとミキーシェちゃんを無事に助ける事は出来なかった。ううん。もしかしたらあのまま人質に取られたまま連れ去られていたかもしれない。そうならなかったのは君のおかげ。だから私はその恩に報いたいの。これは私の戦姫としての矜持で、同時に私自身の信条でもあるの。だからティグル君、君には何が何でも私の気持ちを受け取って欲しいの。いいわね？」

「はい・・・」

恐ろしく真剣な表情で語るアルテミシアにティグルは根負けし、彼女の謝礼を受け取る事を承諾する。

するとアルテミシアは再び笑顔を浮かべて言葉を紡ぐ。

「ありがとう。じゃあティグル君。君を今から私の公宮に招待するわ」

この時、ティグルの脳裏に旅立つ前、恩人であるマスハスが言っていた言葉が浮かんできた。

『良いかティグル。旅というものは時に予想だにしない事が起きる事もある。その事を

肝に銘じておくんじゃよ』

（マスハス卿・・・、あなたの言った通りでした・・・）

こうして旅に出て十日目、ティグルはジスタート王国が誇る七戦姫の一人、アルテミシア＝ヴィルターリアの公宮に招かれる事になる。

そしてこれが彼女達との深く長い交流の始まりになる事を、この時、ティグルはまだ、知らない。

戦姫アルテミシア＝ヴィルターリア

ティグルＳｉｄｅ

「と、まぁ。こんな感じで俺はアルテミシアさんと出会ったんだが・・・って、どうしたんだみんな？」

ティナ達の要望に応じて四年前の旅の話を聞かせている俺だが、何故かみんな関心半分呆れ半分といったような顔をしていた。

「いや・・・、どうしたってお前な・・・」

「どこの世界に二百アルシン先の的に矢を命中させられる十二歳児がいるのよ・・・」

「分かってたつもりだったけど・・・、改めて聞くとやっぱり君の弓の腕はずば抜けていたと思い知らされるよ・・・」

エレン、ミラ、サーシャの言葉にリーザとリムが頷く。

ティナとソフィーはアルテミシアさんから聞いていたからだろうか、ニコニコ笑顔を浮かべていた。

そしてルーリックは何かに納得したように頷いていた。

「成る程・・・。このエピソードが物語の始まりのモデル、ということですね・・・」

「始まりのモデル？　どういうことだ？」
「魔弾の射手の序章の冒頭が、旅の途中の主人公が賊徒に囲まれたヒロインの王女を、三百アルシンの距離から賊徒を狙い撃ち、ヒロインを救うという流れなんですが・・・」
「ええ。あなたが考えている通り、冒頭のストーリーのモデルは今ティグルが話した部分で間違いありません」
「因みに物語の中で距離が三百アルシンになっているのは元になった話をそのまま使うのはつまらないから少し改変したらどうかというヴァレンティナの案を、私とシアさんが採用したんだけれど・・・」
「四年後にはそれが現実になっていた。という訳か・・・」
ルーリックの説明に補足するようにティナとソフィーが続き、エレンが最後を締めた。
因みにソフィーが言っていたシアとはアルテミシアさんの愛称である。
「それでその後はどうなったの？」
「ああ、それから・・・」
ミラの問いに答えるように、俺は旅の話を再開した。

ＮｏＳｉｄｅ

アルテミシアに連れられライトメリッツ公宮にやってきたティグルは初めて見る異国の公宮の壮大さに目を奪われていた。

公宮自体の造り、床を飾るモザイク模様、何もかもが、生まれてからブリューヌ王国の外に出た事の無かったティグルには珍しかった。

「そんなに公宮が珍しいのかしら？」

公宮の中庭でキョロキョロと辺りを眺めるティグルの後ろから声が聞こえる。ティグルが振り向くと、そこにはここまで自分を一緒に馬に乗せてくれたセシルの姿があり、すぐ後ろにはレオとアシュリーの姿もあった。

「え、ええ。あんまりこういう所に来た事無くて・・・」

「別に気にしなくてもいいわよ」

「ありがとうございます。えっと・・・」

「そういえばまだちゃんと名乗ってなかったわね。私はセシル・オブライエン。アルテミシア様に仕えている騎士よ。後ろの二人も私と同じ騎士の・・・」

「アシュリー・シンクレアだ」
「レ、レオノーラ・シアーズ、です・・・」
「ティグルです。よろしくお願いします。セシルさん、アシュリーさん、レオノーラさん」
　セシルの自己紹介に続いてアシュリーはぶっきらぼうに、レオはオドオドしながら自己紹介し、ティグルもまた、丁寧に自己紹介した。
「あらあら、いつの間にか皆仲良くなってたのね」
　ティグルがセシル達と交流を深めていると、今度はアルテミシアがミキーシェと高貴な身形の男性を伴ってやってきた。
（あの子は確か、盗賊達に人質に取られてた子。ということはその隣にいるのはあの子かアルテミシアさんの身内か？）
「アルテミシアさん、そちらの方は？」
「紹介するね。こちらはベルガン＝ヒルリッジ侯爵。私が戦姫になる以前からお世話になっている恩人なの」
　アルテミシアは隣にいる男性、ヒルリッジ侯爵をティグルに紹介し、セシル、アシュリー、レオの三人は侯爵に会釈し、ティグルは深々と頭を下げ、紹介されたヒルリッジ侯爵はティグルの前まで足を進めた。

「君がティグルくんだね？　戦姫殿から話は聞いている。娘の救出に助太刀してくれた事、心から感謝する」
　ヒルリッジ侯爵はティグルに感謝の言葉を贈り、ティグルは戸惑いながらも返事をするために口を開く。
「えっと・・・、アルテミシアさんにも言いましたけど、俺はただ自分が正しいと思ったことをやっただけです。だから、あんまり気にしないでください」
　ティグルは思った事をそのまま伝え、それを聞いたヒルリッジ侯爵は「そうか・・・」と一言言ってそのまま黙った。
「あ、あの！」
「ん？」
　ふとティグルが視線を横に向けると、ミキーシェが目をキラキラ輝かせながらティグルを見ていた。
「助けていただいて本当にありがとうございます！　ティグル様！」
「ティグル様⁉」
　突然自分を様付けで呼ぶミキーシェに、ティグルは戸惑いを禁じ得ず、慌てふためく。
「ちょちょちょ・・・⁉　ちょっと待ってくれ！　助けたと言っても、俺はただ遠くから矢を射っただけで、そんな大層な事は・・・」

「あら。十分大層な事はしてると思うけど？」
「アルテミシアさん!?」
　まさかのアルテミシアの介入に、思わず声をあげるティグル。
「これは侯爵やミキーシェちゃん、そしてティグル君にも言ったけど、あの時の私にミキーシェちゃんを確実に救う方法は思いつけなかった。もしティグル君が矢を射っていなかったら今頃ミキーシェちゃんはどうなっていたか分からないわ」
　今頃どうなっていたか。そんな〝もしも〟を想像したのか、ミキーシェは一瞬体を震わせ、ベルガンも無意識に右手の握り拳に力が入った。
「ティグル君。あの時あなたは戦姫である私が出来ないと判断した事をやってみせた。それを大した事じゃないとは誰も言えないと私は思うわ」
「アルテミシア様の言う通りです！　ティグル様もアルテミシア様と同じ、私の命の恩人で、尊敬するお方です！」
　真剣な表情で話しながら最後はニコリと微笑むアルテミシアと、目を輝かせるミキーシェに、ティグルは小恥ずかしそうに軽く頬を掻く。
（参ったな・・・。まさかティッタやアルサスの領民以外に様付けで呼ばれる事になるなんて・・・。しかも相手は侯爵家の息女。本当にマスハス卿が言った通り、思いもよらない事ばかりだな・・・）

「さて、日も落ちてきた事だし、そろそろ夕食にしましょうか。アシュリー、レオ。私はまだ侯爵とお話があるから、ティグル君とミキーシェちゃんを食堂まで案内してあげて」
「「はっ！」」
アルテミシアの命を受けたアシュリーとレオノーラに連れられて中庭を後にするティグルとミキーシェ。
中庭にはアルテミシアとベルガン、そしてセシルの三人のみとなった。
「・・・・・・、戦姫殿」
「何でしょうか？」
「戦姫殿はあの少年をどう見ますか？」
「そうですね・・・。少なくともただの流れの旅人でない事は間違いないかと・・・」
「そうか・・・」
冷徹な表情でティグル達が去った方を見るベルガンに、アルテミシアとセシルもまた、冷徹な表情でベルガンと同じ方を見ていた。

その後、ティグルはアルテミシアやミキーシェ達と共に夕食を食べた。

夕食に出てきた今まで見た事のない豪華な料理の数々に、ティグルは少し緊張しながらも、しっかりと堪能した。
夕食を食べ終えた後、ティグルはアルテミシアの厚意で公宮に部屋を用意され、その日はそこで一泊させてもらう事になった。
「ふぅ～。やっぱりすごいな・・・。同じ貴族と一言で言っても、ここまで違うものなんだな。ベッドもフカフカで気持ちいいし」
用意された部屋のベッドに横になりながら、ティグルは自分とアルテミシアの違いを改めて知った。
その後、ベッドの上で室内にあった本を読みながらあくびをしていると、誰かが部屋の扉を叩いた。
「ティグル君。今よかったかしら?」
扉の向こうからセシルの声が聞こえる。
「はい。どうかしたんですか?」
「アルテミシア様がティグル君に訊きたい事があるから、今から部屋に来てほしいんだけど・・・」
「分かりました。すぐ行きます」
ティグルはベッドから起き、軽く身なりを整えてから扉を開けて部屋の外にいたセシ

ルに案内されて、アルテミシアの部屋に向かう。
途中ティグルとセシルは部屋にあった本の感想等、他愛の無い雑談をしながら暫く歩いていると、目的地であるアルテミシアがいる執務室が見えてきた。
執務室の前に着いてまずセシルが扉を三回ノックし、中からアルテミシアの返事が聞こえた後、セシルとティグルは執務室に入った。
執務室の中には机に向かって座っているアルテミシアの他に、レオノーラとアシュリーの姿もあった。
「ごめんなさいね、ティグル君。急に呼び出したりして」
「いえ、別に気にしないでください。それより、俺に訊きたい事があると聞いたんですけど・・・」
「ええ。どうしても訊いておかなくちゃいけなかったから・・・。
ブリューヌ貴族の縁者であるあなたが、どんな目的でこのジスタートを訪れたのか」

アルテミシアの口から発せられた言葉を聞いた瞬間、ティグルの思考が停止した。

アルテミシアＳｉｄｅ

呆然とするティグル君の様子、扉のすぐ近くにいるセシルの無言の頷きから、私は自分の予想が正しかったと確信した。

「えっと・・・、お、俺が、ブリューヌ貴族？　アルテミシアさん、何を言って・・・」

「惚けたいなら別に構わないよ。でも、そうなると私は君を疑わなくちゃいけなくなるの」

「・・・・・・・・・・」

困ったような顔をしながら口を開くティグル君。だけど私の言葉を聞いてまた顔を顰める。

ティグル君は辺りに視線を移し始めたけど、入ってきた扉にはセシルがいて、左右の壁にはアシュリーとレオがティグル君を挟むように立っている。

彼にその気があるかは分からないけど、逃げられない事はこれで分かったと思う。

「ティグル君」

私が名前を呼ぶと同時にティグル君はハッとした表情で私の方に視線を戻した。

「君は今日、私達の過失で取り逃した盗賊達に人質に取られたミキーシェちゃんを助けてくれた。私はそんな君を恩ある客人としてこの公宮に招いた。それは紛れもない私の本心よ。それに、知り合ってまだ一日も経ってないけど、私は君が良い人だって思ってるわ。でもね、私にはこのライトメリッツの公主として、この地の民達を守る義務がある。だからもし君がこのライトメリッツ、延いてはジスタートに不利益をもたらすなら、残念だけど相応の対応をしなければならない。でも出来るなら私も君に酷い事はしたくない。だから教えて。本当の君の事を。何の目的でこの国にやってきたのか」

ティグル君は暫くの間目を閉じて思案を巡らせた後、何かを決心したように頷いて、目を開ける。

「・・・・・・・・・、分かりました。全て、お話しします」

それからティグル君は、自分の本当の名前がティグルヴルムド＝ヴォルンといい、ここライトメリッツとはヴォージュ山脈を挟んで接しているアルサスという地を治める

ブリューヌ貴族、ウルス＝ヴォルン伯爵の一人息子である事。その父から見聞を広めるべくこのジスタートを巡行するよう命じられた事。その途中で私達に出会い、現在に至っている事などを話してくれた。
「以上が、俺がジスタートに来た理由です」
「じゃあ今のティグル君とブリューヌ王国は殆ど無関係、という認識でいいのね？」
「はい」
「そう・・・、なら良かったわ。恩人のティグル君を疑わなくて済んで」
不意にそんな言葉が漏れたが、これは嘘偽りの無い私の本心だった。
ふと見るとセシル達も警戒を解いていた。
「あの・・・」
「ん？」
「どうして俺がブリューヌ貴族の人間だって分かったんですか？」
「ああ、その事。そうね・・・、うん。いいわ、教えてあげる」
私は一度咳払いをして、再び口を開く。

NoSide

「まず最初に不審に思ったのは、崖の上でティグル君と出会って、言葉を交わした時よ」
「言葉？　俺の言葉、何かおかしかったですか？」
「おかしいと言う程のものじゃないわ。だけど、私達が普段話す言葉と比較すると、あなたの言葉は若干訛って聞こえたわ。そしてその訛りがブリューヌ人特有のものである事を思い出した私はこの時点であなたがブリューヌ人だと気付いたわ」
　アルテミシアの考察を聞いてティグルは目を見開く。
　まさか数回言葉を交わしただけで自分の出身がバレるなど、夢にも思っていなかったからだ。
「そして次に違和感を抱いたのがティグル君の態度。あの時、剣を突きつけられていたのも関わらず、あなたは取り乱す事なく、持っていた武器を手放し、無抵抗の意を示した。そして極め付けは私が戦姫である事を知った時、あなたは流麗な動作で私の前に跪いた。少なくともあれは平民に出来る動きじゃないと思ったし、それなりの教育を受けている事が窺えたわ。以上の事から私はティグル君をブリューヌ貴族に所縁のある人間ではないかと推察したわ」
　アルテミシアの慧眼に驚きを禁じ得ず、ティグルはポカンと口を半開きにしながら呆然としていた。
「だけど弓を蔑視する傾向のあるブリューヌで、わざわざ弓を使う貴族がいるのかとい

う疑問も無いわけじゃ無かった。だから私はあなたを見極める為にある仕掛けをさせてもらったわ」
「仕掛け？」
「ティグル君、あなたを案内した部屋の机の上に置いてあった本、読んだわよね？」
「へ？　ああ。あれですか？　ええ。読みましたけど・・・」
「どんな内容か説明できる？」
　アルテミシアの問いに、ティグルは頭を掻きながら口を開く
「えっと・・・、まだ途中までしか読んでませんけど・・・、確か、無実の罪を着せられた騎士が、自分に罪を着せた国王や大臣達に復讐する。といった感じの内容だと思ってるんですけど・・・」
「正解よ。じゃあどうして内容が理解できたのかしら？」
「どうしてって、そりゃ勿論読んだからに・・・って、あれ？」
　アルテミシアの問いに答えていく内に、ティグルはある事に気付く。
「気付いたみたいね。そう。私はあなたが本当にブリューヌ貴族の縁者かどうかを確かめる為に態(わざ)とあの本を部屋の机の上に置かせたの。

ブリューヌ文字で書かれたあの本をね」

そう。ティグルが部屋で読んでいた本はブリューヌ文字で書かれた物だった。だからティグルは本の内容を理解する事が出来た。

しかし冷静に考えてみると、何故ジスタートの公宮にブリューヌ文字で書かれた本があるのか？　という疑問が浮かぶ。

その答えは先程アルテミシアが言ったように、ティグルの素性を探る為であった。

「あの本はブリューヌ文字にかなり精通していないと、内容を理解するのは困難だと聞いているわ。それこそ、幼い頃からブリューヌ文字を学ぶ機会のあるブリューヌ貴族でもないかぎり。後は時間を見計らってセシルにティグル君を迎えに行かせて、ここに来るまでの途中でさりげなく本の事を訊いて内容を理解しているか否かを確かめて、もし理解していたら三回、していなかったら二回、扉をノックするようセシルに指示をしておいたの」

そこまで考えられていたとは毛程も思っていなかったティグルは、またしても呆然としていた。

「さて、それじゃあこれで問題は解決したわね」
「え？」
　突然のアルテミシアの宣言に、ティグルは思わず声が漏れる。
「だってそうでしょ？　ティグル君がジスタートに来たのは飽く迄個人の見聞を広める為であって、私達の不利益になるような事をするつもりは無いんでしょ？」
「それは勿論そうですけど・・・。俺がこんな事言うのも何ですけど・・・、いいんですか？　そんな簡単に俺を信じて・・・」
「大丈夫。君は信用出来るって、私の勘がそう言ってるから」
　屈託無い笑顔で答えるアルテミシアに、ティグルは内心、それでいいのか？　と思いながらセシル達に視線を向けた。
　対してセシル達は、いつもの事だ。と言わんばかりに、苦笑いを浮かべていた。
「さて、それじゃあこの話はこれで終わりにして、そろそろ次の話に移りましょうか？」
「次の話？　まだ話す事があるんですか？」
「ええ。むしろ私個人としては、こっちの方が本題なの」
　そう言うとアルテミシアは机に両肘を付け、一息付いてから口を開いた。

「ティグル君。私に仕える気は無いかしら？」